

シルヴィアって誰？

テレンスラティガン 作

能美武功 訳

(題名に関する訳註 原題は Who is Sylvia?。これはシエイクスピアの「ヴェローナの二紳士」の中に出てくるセレナーデの名前。ドイツ語に訳されて、シューベルトがこれ作曲している。)

登場人物

マーク

ウイリアムズ

ダフニ(プレンティス)

シドニー

イースル

オスカー(フィリップスン)

バブルズ(フェアーウエザー)

ノラ(パタスン)

デニス

ウイルバーフォース

ドリス

クロウイー

キャロライン

第一幕 一九一七年 夏 午後八時頃

第二幕 一九二九年 春 午後六時頃
第三幕 一九五〇年 冬 午後六時頃

(すべての場はナイトブリッジにあるアパートの一室)

第一幕

(場 ナイトブリッジにあるアパートの二階の一室。左手に大きな窓。静かな通りに面している。奥の扉は玄関ホールに、右手の扉は寝室に通じている。独身の男が住んでいるらしい部屋。家具の選び方は一流だが、飾り類は単調で、ありふれている。即ち、名画のコピー。主にオランダの風景画。それから、少女の頭部のブロンズが、あまり人目につかないように置いてある。)

(時は一九一七年夏、夕方の八時頃。薄暗くなり始めているが、それでも幕が開くと部屋の中央に、食事用のテーブル、そしてその上に二人分の食器類が置かれてあるのが見て取れる。部屋は現在のところ、無人。)

(玄関の扉が開く音がし、暫くしてマーク登場。三十二歳。いつも背広はサヴィル・ロウ、あるいはその付近で仕立てている。シングル・プレストのディナージャケット、それに白いチョッキを着ている。小脇に何か抱えていて、その紙袋を取ると、それがシャンペンであることが分かる。それをサイドボードの上に置く。それからテーブルの上のものを調べる。二、三細かい変更を行なう。次に部屋の全体を眺め、ソファを念入りに調べ、クッションの位置を直す。それから急に思いついたように窓へ行き、重いカーテンを引く。部屋は一瞬

暗くなる。が、スイッチを捻り、再び明るくなる。それが明る過ぎると見てか、少し考えた後、また少し明るさを絞り、薄暗くする。テーブルの上にある花瓶の花の位置を変える。その効果を見るために立つて後ろに下がる。あまり効果ないという表情で、再び椅子に坐る。そこからもう一つの椅子のある席に向かつて、声は出さず、口だけを動かして、生き生きした会話を実行する。その時相手を見るためには花が邪魔で、首を曲げる必要があることに付く。そこで花瓶の位置を少しずらせる。）

（さて、もう一度部屋を一渡り眺め、「これぐらいで良からう」という表情。シガレットケースから煙草を取りだし、火をつけ、きびきびと電話器の方に進む。）

マーク（受話器に向かつて。）ハロー・・・スローン七八三八を頼む。（返事を待つ間、相変わらず部屋を眺め回す。）カンリツフか？・・・そうだ・・・奥様はそこか？・・・うん、頼む・・・ああ、キャロライン・・・実はね、急に酷い事が起こってしまった。丁度今メソポタミアから長い電報が入ってね、夜遅くならないと帰れそうにないんだ・・・そつだな、一番早くても夜中の十二時だ。まづそれよりはずつと遅くなると見た方がいい。ひよっとすると・・・え？君の親父さん？頼むよ。会えなくて残念だつて僕から・・・いいんだ、そんな事は、キャロライン。そんな事は不要だ。事務所ですくでも軽食は取れるんだから・・・いいんだ、大丈夫なんだから。戦争中だ。こういふことには慣れておかなきゃ・・・メソポタミアって言ったけど？・・・うん。暗号の名前だ。これは世界中で一番複雑なんだ。この暗号は、

・・・デニスには僕の代わりにキスを頼む。お利口にするんだと言っておいてくれ。・・・え？そんなことをか。（相手の言いなりになって。）分かる分かる、キャロライン。君の言う通りだ。そいつは我儘だ。明日の朝僕から言つて聞かせるよ・・・うん、きつく言うよ、必ず・・・今夜は悪い、本当に・・・じゃ、お休み。（電話を切る。再び交換手を呼び出すためにハンドルを回す。）ハロー、交換手？ああ、今のは終わった。ヴィクトリア八四四〇を頼む・・・もしもし、外務省？こちら子爵のセント・ネオッツ。今夜の東局の当直は誰なんだ？・・・簡単な質問だぞ、これは。君はただ答えさえすればいいんだ・・・ねえ、君。こちらは子爵、セント・ネオッツなんだ。外務省の。もう九年も勤めているんだ。今私が知りたいのは・・・身分を証明しろつて言つたつて、電話でどうやれつていうんだ。私は子爵、2セント・ネオッツ。ピンフィールド侯爵の息子。既婚。息子が一人。五歳。名前はデニス。住所、ベルグレイヴ・スクエア五十八番。これぐらいでどうだ？その他、確かめたいことがあれば何でも訊いてくれればいい・・・（怒つて。）上司のモールが許さんだと？モールに言うんだ。貴様は大馬鹿だな。私がドイツのスパイなら、態々外務省になんか電話するか。それも中東局の今夜の当直を訊くなどと。とつくに知つてる筈だ。スパイなら、そんなことぐらい。だいたいのそのスパイが中東局で働いているかも知れないじゃないか。（この最後の冗談は自分でも気に入った様子。満足そうにすすす笑う。）・・・ああ、切つていいよ。言いたいことは言つた。（再びハンドルを回す。）ハロー、交換手？・・・

もう一回ヴィクトリア八四四〇を頼む。途中で切れたんだ。．．

・（怪しい作り声の、がらがら声で。）中東局に繋いでくれ。もしもし、中東局？．．（普通の声で。）今夜の当直は？．．

・ ミスター・セイモア？ よし。じゃ、繋いでくれ。．．

チャーリーか。マークだ。ちょっと頼みがあるんだ。家から電話がかかって来たら、僕は君と一緒に。メソボタミア暗号解読中と願いたい。僕は解読のまっ最中で手が離せない。．．

・ 何？．．そうか。その方がいいか。ちょっとコーヒーで席を外してるね。さては経験あるな？．．いや、僕はない。本当、一度もないんだ。この七年間で初めてだ。信じてくれなくていいが、本当なんだ。．．いや、別に恥とは思ってない。まだ。明日になったらそうなるかな。今は何とも。．．

・ あ、そうだ、チャーリー。家から電話があつた時、この番号を知つた方がいい。ここはスローンの．．畜生、忘れてるぞ。あんなによく覚えていたのに。いや、受話器に書いてない。．．そうだ。電話帳にあるから調べておいてくれ。オスカー・フリップスの名前で登録されてる。いいな、オスカー・フリップスだ。住所はナイツブリッジだ。ウイルブラム・テラス十二番。有難う、チャーリー。いつかまた。今度は僕が今の君の役をやるから。．．（遅ればせながら。）あ、ところで、奥さんに僕からよろしくと。

（オスカー・フリップスの召使い、ウイリアムズ登場。背が低く、身ぎれいな服装。態度はごつごつしている。従卒あがりの為、「畏まりました」「ミロード(My lord)那樣」の言い方は召使いのそれよりも軍隊でのそれ。）

ウイリアムズ あ、もうお着きでありましたか、ミロード。

マーク ハロー、ウイリアムズ。

ウイリアムズ この時間とは存じませんが。出掛けようとしていた所でありました。で、こんなものでよろしいでありますか。

マーク（立ち上がりながら。）うん、いい。有難う、ウイリアムズ。完璧だ。うん。

ウイリアムズ 勿論もつ少し前もって分かっていましたら、私もなんとか都合をつけて、留まる場所でありましたが。

マーク それはいいんだよ。実際、君が出て行ってくれんで有り難いくらいだ。えーと、いや、その、ここまでやってくれるとは実に有り難いということ。．．

ウイリアムズ ああ、それはいいのであります、ミロード。正直を申しまして、こういうことが出来て嬉しいのであります。一日中何もすることがないと、これもまたつまらないもので。．．あ、その台所で一人ぼつねんとただ坐っている。大尉の次の休暇が何時かと期待しながら。．．

マーク 彼から便りは？ ウイリアムズ。

ウイリアムズ 一週間前、一行だけ。休暇が取れたとか言う話でありまして。勿論冗談であります。ご存じの通り、大尉は何時でも。．．

マーク で、それに対する君の対応は？

ウイリアムズ この間の手紙にこう書いたであります。

「聞くところによりますと、戦争はこちらの優勢のうちに推移しているとのこと。多分、クリスマスには必ずお帰りになれるでしょう」と。

マーク そりゃあいつ、怒ったろつな。

ウイリアムズ ええ。フランスにいて見ると、こっちで見るとでは戦局は大違いであります。自分はソナムに配属になっておりましたが、小包を受け取る前に家人から必ず手紙が届いておりまして、それには、「快進撃、洵に喜ばしう存じます」と。こっちはもう三週間も同じ塹壕に釘付けになっている時です。

マーク 君、ソナムに配属になっていたのか。そいつは知らなかったな。・・・僕はソナムには行き損なった。

ウイリアムズ 負傷でありますか？ それで本国送還に？

マーク いや。外務省の特別な計らいで行かせて貰った。

そして去年その計らいの期限が切れたのでね。

ウイリアムズ 肝が冷えたでありますか？

マーク 冷えたな。冷えきって、冷凍肝だ。

ウイリアムズ 自分もであります。地下鉄でこの間、変なばあさんが自分に話しかけてきたであります。「あんた、若いのに何だね。軍服は着とらんのかね。」自分は言ったであります。「こんな酷い戦争に誰が従軍するもんか。このお節介ばあ。」いや、ばあさん、怒りました。車掌を呼んだり、大騒ぎだったであります。（思い出し笑いをする。）さて、ミロード、他に何か？ 自分はもう出なければならんであります。

マーク いや、何もなし。有難う、ウイリアムズ。

ウイリアムズ えー、像を出しましたのは自分であります。お気がつかれましたか？

マーク ぞう？

ウイリアムズ はい。ブロンズであります。

（ウイリアムズ、台の上ののったブロンズ像を指さす。）

マーク ああ。

ウイリアムズ この主（あるじ）が物置にしまい込んでいて。どうやら、あまり良いとは思っていない様子であります。自分は良いと思っておるであります。

マーク 有難う、ウイリアムズ。

ウイリアムズ このようなことが出来るのは素晴らしいであります。

マーク いや、ただの趣味でね。

ウイリアムズ ただの趣味とは言えんであります。プロになるべきであります。自分がもし、彫刻なり、絵画なり、その他何か出来さえすれば、一日中かかりつきりでやるであります。勿論自分は読書はやるであります。これは彫刻などとは違うであります。（シャンペンを見て。）シャンペンは御持参でありますか。この家のを使うべきであります。オスカー・フィリップスン大尉はお使い戴くのを喜ぶ筈であります。

（シャンペンの罎を氷のバケツに入れる。）

マーク いや、それは好意に甘え過ぎだ。ところで今夜のことは手紙で大尉には連絡すみなんだが・・・

ウイリアムズ はい、ミロード。

マーク うん。それでな、ウイリアムズ。（急に当惑の表情で。）何か事が起こって・・・つまりその、急に嵐が来るとか何とか・・・それで一晩泊まりたいということになった時のことだが・・・それは大丈夫なんだな？

ウイリアムズ はい、ミロード、それはちゃんと。ベッド

も用意がしてあるであります。

マーク 勿論その必要は多分ないが……

ウイリアムズ いえ、それは分かりません、ミロード。今夜はとても蒸し暑く上空では相当雷が発生していると思われ
ます。玄関にメモを残しておいて下されば、自分はそのよう
に動くであります。

マーク そうしよう。ああ、ウイリアムズ……これで
会わないといけないから……（財布を取り出す。）

ウイリアムズ いえ、ミロード。その必要はないでありま
す。

（マーク、一ポンド紙幣を渡す。）

ウイリアムズ あ、そうでありますか。それはどうも有難
うございます。

マーク 女の娘（こ）と約束か。

ウイリアムズ 女の娘はいないであります。つまりその、
決めている女の娘は。決めない主義であります。

マーク 決めない主義？

ウイリアムズ はあ。一生一人の女に縛られるのは男の意
気に関わるであります。……つまりその、これは自分の意
見であります、男の精神を蝕んでくる。つまり、年より早
く老けるということ……

マーク おいおい、ウイリアムズ。私は結婚している男な
んだがね。

ウイリアムズ ええ、それは、*thats a son of a gun*（シャッカ
ン・ア・ソン・グウ 人は好き好き）ですから。自分はその、
うまく行っている人間のことを言っているのではないので。

うまくさえ行っていれば……ただ、どうも結婚している男
を見ますと大抵はその……問題があるようであります。

マーク 尤もなところがあるぞ、ウイリアムズ、その言に
は。

ウイリアムズ いえ、これは私の言ではないので。これは
エイチ・ジー・ウエルズの、あの頭のいいエイチ・ジー・ウ
エルズの言でありまして。

（玄関にノックの音。）

マーク あつ、あれは私の客だぞ。

ウイリアムズ もっと前から鳴ってたかな。ここからはベ
ルが聞こえ難いであります。では自分が出るであります。

マーク（上の空で。）いや、差し支えなければ、玄関には
私が出よう、ウイリアムズ。あの娘が家を間違えたと思っ
てはまずい。住所だけしか教えていないんだ。

ウイリアムズ 住所だけ？ つまり名前もお教えにはなっ
ていない？

マーク うん、名前も言っていないな。

ウイリアムズ 全くなしで？ 偽名もでありますか？

マーク 偽名もだ。何もなしだ。そういうことを話す暇が
その時になくてな。バスでホワイトホールからハイドパーク
コーナーまで。短い時間だ。あれは相当短い時間だ。

ウイリアムズ ははあ、例のあれですな、ミロード。では
自分はキッチンに暫く退避します。お二人が部屋に入った頃
を見計らって退散するであります。

マーク そうしてくれ。（玄関の方に進みかけ、途中で戻っ
て来る。）

(玄関にまたノックの音。)

マーク ウイリアムズ、名前は何かつけた方がいいかな。

ウィリアムズ それはその方が・・・

マーク じゃ、どんなのが・・・

ウィリアムズ(ちょっと考えた後。) 大尉はメイスンが専門で。

マーク メイスンか。好きじゃないな。ありふれてる。ロビンソンはどうだ。

ウィリアムズ ロビンソンというお顔ではありません、ミロド。

マーク スミスは？

ウィリアムズ スミス？ それはひどいです。(考えた後)

フェザーストンホー？

マーク 何だいその名前は。

(三度目のノックの音。)

マーク 参ったな。ほっとくと逃げられちゃうぞ。・・・

そうだ、ライトだ。これならいいだろう？ 悪くない。な？

うん。ライトで行こう。

ウィリアムズ ええ、ミロド、それなら。じゃ、ミスター・

ライト、Bonedance (ボヌ・シャランス 仏語「成功を」)

(二人、退場。マークが先に。暫くして玄関の閉まる音が聞こえ、ホールに声がする。)

マーク(舞台裏で。) (ここ、すぐ分かりましたか？)

ダフニ(舞台裏で。) ええ、すぐ。地下鉄でノッティングヒルから二つ目ですもの。すぐ分かったわ。

(マークに導かれ、ダフニ登場。二十一、三歳。イヴニング・

ドレスでないの、帽子を被っている。そのため顔がはっきりとは見えないが、傍にあるブロンズの頭部像にそっくり。声は少し警戒済み。)

ダフニ あらまあ、それ、夜会服じゃないの。酷いわ、私には・・・

マーク 違う違う、これはただのディナー・ジャケットだよ。平服と同じなんだから。

(ダフニ、部屋を見回す。)

ダフニ(うっとりして。) まあ、絵だわ！ 私、絵って大好き。あなたは？ そうね。勿論好きに決まってるわね。あ、あれ、家にあるのと同じだわ。(ある絵の前に立ち、通の目でそれを眺める。)

マーク(その後)に立ち。(オランダ派だ、これは。

ダフニ そう。(眺める。) ああ、でも、家のは少し色が違うわ。それに家のはもっと午が多い。「高地の夜明け」という題。何ていう画家なのかしら。

マーク そうだな・・・よってたかって描いたんじゃないかな。

ダフニ(少し軽蔑の色を表して。) フォータレスキューさんに訊いてみるわ。あの人なら知ってる。会社の私の上司なの。素敵なのよ、その人。何でも知ってるの。訊けば何だって答えてくれる。

マーク へえー、偉いんだね。

ダフニ そうよ。(秘密を言う、という調子で。小さな声で。) あのー、ちょっと・・・ウージャーはどこかしら。

マーク ウージャー？

ダフニ そう。オム・ティドウリー・オム・ポム。

(マーク、相変らずけむにまかれた儘。)

ダフニ ウムティー・プー。

マーク(やっと分かって。)ああ、ウムティー・プーか。ご免。気がつかなくて。このドアを通ってまっすぐ行って、右側だ。(寝室のドアを開けてやる。)

ダフニ(マークの傍を通る時に。)気にしないわよね、こんなことあからさまに訊いたって。若い娘は今近代的になくちゃ。

マーク(力を入れて。)そう。近代的好い。近代的好い。

(ダフニ退場。マーク、サイドボードに進み、キャビアの罎を開けようとする。ホールの扉に小さなノックの音。それからウイリアムズ登場。)

ウイリアムズ 入ったでありますか、あの娘。

マーク うん。ウージーだ。

ウイリアムズ 電気がついたのを見ただあります。これをお持ちしました。焼き立てのトースト。キャビアに合うであります。

マーク 有難う、ウイリアムズ。

ウイリアムズ ミロード、あの娘、入って来る時にちょっと顔を見ただあります。驚きました。瓜二つであります。

マーク 瓜二つ? 何のことだ。

ウイリアムズ それとであります。(ブロンズ像を指さす。)

マーク ああ、そう思うか。

ウイリアムズ 間違いなしてあります。それとも・・・そうだ、あの娘がモデルだ! あの娘に坐って貰ったであります。

すね、ミロード。

マーク それは違う、ウイリアムズ。あれはモデルはなしだ。

ウイリアムズ では想像で、でありますか?

マーク 記憶だ。

ウイリアムズ どなたので?

マーク 昔の知り合いだ。

ウイリアムズ(頷く。それから。)酷い帽子ですな、あれは。帽子の役割というものを知らんであります、女つていうものは。

マーク そうだな。(苛々して。)ああ、ウイリアムズ、もうそろそろ・・・

ウイリアムズ 大丈夫であります、ミロード。まだあそこにいるであります。ここから光が見えるであります。自分はいつも言っておるであります。女つてのは美人に見せる為なら何でもやると。大尉の最近の女をご存じでありますか。イスルと言つてありますが、お会いになったことは? ミロード。

マーク(上の空。)さあ、どうかな、ウイリアムズ。大尉の女達は皆イスルという名前だったじゃないか。

ウイリアムズ このイスルは間違いつこなしてあります。あの女の着るものと言つたら。まあとにかくすごい、とだけ言える代物であります。いや、すごいという言葉ぐらいではすまないであります。いつかなど・・・あ、ミロード、

灯が消えました。じゃ Vivesport. (ヴィーヴ・ル・スポール 仏語「お楽しみ!」)

(ウイリアムズ、扉から退場。後ろ手に静かに扉を閉める。
暫くしてダフニ、寢室の扉から登場。)

マーク ああ、ハロー。

ダフニ 外のあれ、あなたの庭？

マーク え？ ああ。このアパートのね。

ダフニ 庭があるっていいわ。特にこの季節。

マーク じゃ、後で庭に出よう。

ダフニ ええ。素敵だね。どこから出るの？

マーク 寢室からだ。

ダフニ ああ。(少しの間。) ええ、いいわね、それは。

マーク さ、坐ろうか。残念ながら、温かいものが出せなくてね。使っている男が、夜、休みをくれって言うもんだから。

ダフニ(坐りながら。) 最近召使いって本当に問題よね。

みんな共産主義のせいなのよ。

(マーク、ダフニを坐らせたあと、キャビアを皿に取り分ける。少し勿体をつけた手付き。ダフニ、取り分けられたものを目を丸くして眺める。しかしそれが何か、と訊くのは控える。)

マーク そうだね。

ダフニ(キャビアを用心深く調べながら。) ひどいわよね、ロシア人のやること。ツァーの首を斬っちゃうなんて。長い間あの人、国を治めてきたんでしよう？ それを。でもどんな事でも裏からも見られるわね。その目から見れば当然とも言えるわ。毎日毎日あんな暮らしをして、それにラスプーチンをあんなに取り立てたり。それに国には経済の問題って

うものがあるわ。ね？

マーク あ、失礼。ちょっと聞いてなくて。

ダフニ ロシアで起こったことについて私の考えを述べてたの。

マーク ああ、あれか。あれなら君の意見に全く賛成だ。

国には経済の問題ってもんが・・・(この時までにはシャンペンを開けようと苦心していたが、ここで開く。) ああ、開いたよ。(少しダフニのグラスに、その後自分のグラスに注ぐ。)

ダフニ まあ、素敵。スパークリング・ゲラゲラ・ヴァッサー。

マーク はあ？

ダフニ シャンペンのこと。ゲラゲラ・ウオーター。ウオーターってドイツ語でヴァッサーって言うでしょう？ だから、ゲラゲラ・ヴァッサー。

マーク でもこれはドイツ製じゃないけど。

ダフニ そんなこと言っていないわよ。ただの名前。フォーテスキューさんが発明したの。

マーク ああ、フォーテスキューさんね。(ダフニの向かいに坐る。) 実は・・・これはランソンの一九〇四年ものなんだ。(ダフニ、少しすすする。)

ダフニ(やっど。) そう。これが一九〇四年もの。あら、まあ。

(マーク、ダフニを見るが、何も言わない。ダフニがキャビアに手をつけていないのを見て、その理由を見抜く。)

マーク キャビアがお気に召すといんだけど。さもないと、この製造会社の社長二人、責任を取らされて首を斬られ

ちやうぞ。

(ダフニ、ケラケラと笑う。マーク、自分の冗談が効を奏したことに気をよくする。)

ダフニ あなた、そんなこと言う時、フォーテスキューさんとそっくり。

(マークの顔から微笑が消える。)

マーク そっくり？ そう？

ダフニ これ内緒だけと言っちゃうわ。私、キャビアって食べた事ないの。これが初めて。

マーク 何でも「初めて」から始めるしか手がないんじゃない？ トーストは？

ダフニ まあそうね。(スプーンでキャビアをすくう。)

さあ、行くわよ。(キャビアを類ばる。一瞬、「酷い味！」という顔。しかしすぐ立ち直る。) あら、美味しいわ。ね？

マーク うん、そう思っがね。(グラスを上げて。) さあ、僕の生涯で出会った腫の中で一番美しいつぶらな腫、それに乾杯！

ダフニ まあ、オスカー・ワイルド流ね。(少し飲んで、ゲラゲラと笑う。)

マーク(立ち上がる。) ねえ、見てたけど、君、そのキャビアあまり気に入らないようだね。

ダフニ そう言って下さったから白状するけど、私、魚介類ってちょっと苦手なの。

マーク そうか。じゃ、次に行こう。(二つの皿を引き上げる。)

ダフニ でも残念ね。だってそれ、ひどく高いんでしょう？

マーク だけど高い安いってのは、相対的なもんだからね。

ダフニ そう。絶対相対的よ。ね？(マーク、次の皿をダフニの前に置く。) あら、チキンだわ。素敵！

マーク チキンなら安全か。良かった、良かった。(シヤンペンをもう一杯注ごうとする。)

ダフニ 止めて。私、酔っ払いたくないのよ。酔うとひどいの、私。

マーク ひどいって、想像つかないね。一度見てみたいよ。ダフニ(目を上げて。) 私、後悔するような事、してしま

うかもしれない。
マーク(誘惑するように。) 君は後悔するかもしれない。でも、僕は？

ダフニ あなた、お上手ね。独特のスタイルだわ。じゃ、ほんのちよつと。ここまで。

(ダフニ、グラスの、ある位置を指さす。そこまでは注いでいいという場所。)

ダフニ あーら、綺麗な色！ さ。(グラスを上げて。)

何に對して乾杯する？
生きることに？ 死ぬことに？
笑うことに？ 泣くことに？

まあいい、あれにでも、これにでも。
でもまあ、あれにしとこう。乾杯！

マーク フォーテスキューさんの発明だね？
ダフニ そうよ。どうして分かった？

(マーク、シヤンペンの罎を氷のバケツに入れ、テーブルに戻り、坐る。)

マーク さあ、どうしてかな。(グラスを上げて。)今度はこっちの乾杯。僕の言うのはこれだけ。・・・愛に対して、乾杯！

(ダフニ、ゲラゲラ笑う。二人が食べている間、適当な間あり。)

ダフニ ねえ、私、あまりあなたのこと知らないわ。だって、名前も知らないのよ。

マーク そうだったかな。

ダフニ 何ていうの？

マーク マークだ。

ダフニ マーク？(少し考えて。)ああ、いい名前ね。

マーク そう？ いいと思う？

ダフニ(しつかりと。)(いい名前。マーク。気に入ったわ。で、苗字は？)

(マーク、シャンパンを飲んでる途中だったが、急に咳こむ。答えるまでに必要以上の間あり。彼の真剣な顔つきから、どうやら決めた名前を忘れたらしい。)

マーク(やつと。)(えーと、その・・・君の想像では？)

ダフニ 私の想像？ 無理でしょう、そんなの。だって名前なんていくらかもあるんだもの。

マーク うん。いくらかもあるけど？

ダフニ(少し軽蔑的に。)(まさか、スミスじゃないでしょうね。)

マーク 勿論スミスじゃない。スミスは駄目だ。

ダフニ 平凡過ぎるもの、ね？

マーク(思い出せない。やげぎみに。)(君の名前はいいよ。)

ダフニ・プレンティス・・・いい名前だ。

ダフニ 嬉しいわ、そう言っただけ。私も少し気に入ってるの。まあ、当たり前って言えば当たり前のことだけだ。

マーク いいよ、その名前。リズムがある・・・そうだ、ライトだ！

ダフニ ライト？ 何？ それ。

マーク(軽い調子で。)(ライト。マーク・ライト。これが僕の名前。気に入った？)

ダフニ 気に入らないわね。

マーク(少し笑って。)(駄目？ どうして？)

ダフニ 気に入らない。それだけよ。

マーク(少しからんで。)(じゃあ、どんな名前がいいって言うんだい。)

(マーク、扉の方を見て。)

マーク フェザーストーンホー？

ダフニ 何それ？ 変な名前？

マーク それは賛成だ。

(間。)

ダフニ(考えながら。)(パーシー・ペニーフェザー。これはいいわ。ね？)

マーク うん、いいね。フォーテスキューもいい。だけど

ね、ダフニ、今の二つよりライトの方が本当はずっといいんだ。ほら、もう少しシャンパン飲んで。そしたらライトが光ってくる筈なんだ。さあ。

(ダフニ、飲む。グラスを下ろす。すぐにマーク、そのグラスに注ぐ。)

ダフニ まあ、あなたって。油断ならんわ。

マーク さあ、少し飲んだらよくなってきたらう？ ライト。

ダフニ そうね。まあね。マーク・ライト、マーク・ライト。言ってるうちに慣れてくるっていうのかしら。とにかく単刀直入って感じね。

マーク 単純で、正直で、直接的。そうね？ 飾りなしだ。

マーク・ライト。この名前は実に気に入ってる。本当だ。マーク・ライト。(この最後の「マーク・ライト」で、マーク、こそりこの新しい名前のために杯を上げる。)

ダフニ で、あなた、何をしてる人？

(マーク、ゆっくりとグラスを置く。)

マーク そうだな、何だと思っ？

ダフニ あなたってあてっことが好きなのね。

マーク あてっこって言ったって、名前より易しいよ、これは。だって職業の数は名前ほど多くないからね。(いい考えが浮かぶ。英語で職業は occupation . . . 「占めるもの」「時間をとるもの」の意から思い付く。) その気になったら君、あてられる筈なんだがね。

(ダフニ、当てることに興味なし。)

マーク 分かったよ。手間を省いてあげよう。僕は彫刻家なんだ。

ダフニ 彫刻家？

(ダフニ、眉を蹙めて考える。間。)

マーク(心配そうに。)(いいだろっ？ この職業。駄目かい？)

(ダフニ、まだ考えている。)

ダフニ(やっど。)(いい。いい職業だわ。彫刻家。)

マーク よかった。

ダフニ で、どんなものを彫るの？

マーク 例えば、(立ち上がってブロンズの方へ進む。)

あれ。

ダフニ(頭を回して。)(あれ？(黙ってブロンズを見る。)

マーク(再び心配そうに。)(いい. . .と思わない？)

ダフニ(覗きこむ姿勢を取って。)(よく見えないわ。)

マーク 持って来て上げるよ。

(マーク、ブロンズを運び、テーブルに置く。ダフニ、それを見る。)

ダフニ 誰？ これ。

マーク 女の子。

ダフニ ただの？

マーク 違う。特別な。これ、君に似ているって思わない？

ダフニ そう言われても、褒められたって気はしないわね。

マーク(少し鋭く。)(褒められたんだよ。君がそう思わなかったら、僕の腕が悪いんだ。この子は猛烈な美人だった。)

ダフニ だった？ 死んだの？

マーク 死んではいない。だけど、これとは随分違うだろうな、今は。これは記憶を辿って彫ったものなんだ。待って

くれよ. . . あれは僕が十七の時だった。今僕は三十二。五年前のことか。(ブロンズを見ながら感慨にふける。)

ダフニ ねえ、つづき、話してよ。

マーク 残念ながら、あまり話すことはないんだ。君が、

がっかりするだけだよ。

ダフニ そんなことないわよ。私、お話って大好き。

マーク そう言うなら・・・今も言ったけど、僕は十七歳だった。あの子は十六。会ったのは、何と、ガーデン・パーティーさ。若い者はテニスをやらされるんだ。主催者側が僕ら二人をペアーにした。で、僕ら二人、かなりうまく戦ったんだ。僕はテニスなんか大の苦手だったんだけどね。そして勝った。六―三、六―二でね。その後、二人で散歩した。あまり遠くには行かなかったんだ。だって、両親達はガーデン・パーティーなんか嫌いで、さっさと帰ろうと思ってるのが見え見えたからね。僕らは柵のところまで来た。そこには枯れた木もあったな。そこでその子、僕にキスをさせてくれたんだ。・・・一回だけ。それからパーティーの場所に戻った。そこから家に帰る時、車の中で僕はオペラの話をした。彼女の家の前で両親と彼女は降りた。それが僕が彼女を見た最後さ。一箇月後、彼女は家族とも南アフリカに行っちゃった。それから後、ずっとそこに住んでる。ウィローピット・グラントという男と結婚して、ケイプタウンの近くに今もいるんだ。綺麗な家らしい。海の近くにあるって・・・そういう話を聞いたよ。

(マーク、言葉切る。ダフニ、奇妙な顔をしてマークを見つめる。)

ダフニ それだけ?

マーク そう。それだけ。

ダフニ あらまあ。おやおやだわ。さっき、がっかりするだろうって言ったけど・・・そうね・・・

マーク もっと動きのあるお話の方がいい?

ダフニ そうね。とにかく、ハッピーエンドの方がいいわね。

マーク (微笑んで。) でも、これはハッピーエンドになる筈だよ。

(間。その後、電話のベルが鳴る。)

マーク くそっ! (立ち上がる。) 失礼。(電話まで行き、受話器に。) ハロー・・・うん・・・分かった。有難う、チャーリー。(受話器を置く。立った儘、困った表情。ダフニを見る。) あー、ね、君、ちょっと頼みたいことがあるんだけど。

ダフニ (用心深く。) それは勿論、ことによるけど。

マーク うん。これは難しいことじゃない。ちょっと僕、電話をかけたんだ。その間、席はずしてくれないかな。これはひどく内密なものでね。

ダフニ 内密? ええ、いいわ。・・・そんなの何でもないわ。(立ち上がる。) 私、分かった。大事なことが。

マーク 大事なこと? 何だい?

ダフニ 後で教えて上げる。(寝室に退場。)

(マーク、受話器を取る。)

マーク スローン七八三八を頼む。・・・(明らかに苛々しながら返事を待つ。しかし声を発する時には、落ち着きを取り戻している。) ああ、キャロライン、僕に電話した? ちょっとコーヒーとパンをかじりに出てたところだね。・・・うん。そりゃ進んでる。なかなか進まんがね。少しづつ。誰?・・・君の親父さん?・・・あ、そう。分た。・・・ああ、今晚は、お義父さん。・・・えっ? 満月? ああ、そうですか。・・・

あ?・・・ツエッペリン?・・・いえいえ、お義父さん、もうツエッペリンの襲撃はありません。あれは完全に終了です。・・・

・地下壕? いえ、大丈夫です。警報が鳴らない限り、あの子は家にいて全く大丈夫です。・・・ですけど、あの子はツエッペリンなんかちつとも怖いと思っただけです。それどころか、どうやらあれを面白がっている風です。・・・そりゃ、あの子の言う通りでもあるんです。空にはサーチライト、パンパンと音がして。子供にはもってこいの光景ですからね。・・・

・あの子に愛情がない? 違いますよ。デニスは自分でそう言っていましたよ。・・・そうです。あの子が私に話しましたよ。お祈りの時、ばあやが、「神様、どうぞツエッペリンが来ないように」とあの子に言わせる。だけどその度に、あの子はこつそり、「神様、どうかそんなことはしないで」と、付け加えるだって。・・・(ギョツとして。)お義父さん、それは止めて下さい。・・・神に対する冒瀆(ぼうとく)じゃありません。・・・いや、止めて。あの子には何も言わないで下さい。そんなこと言ったって、どうせあの子には分かりはしませんから。・・・分かりました。もし来たら、ですね。でも私が保証します。決して来ません。・・・お休みなさい。

(マーク、受話器を置く。今の会話で少しぼつとなつていく。少し上の空で寝室の扉を開け、呼ぶ。)

マーク もういいよ。終わった。

(ダフニ登場。マーク、ダフニがテーブルにつけるよう椅子を引いてやる。)

マーク 中断して申し訳ない。

ダフニ 大丈夫よ、そんなこと。

マーク ちょっと失礼。(窓のところに行き、燈火管制に気をつけながら、カーテンの間隙から外を覗く。)

(ダフニ、じつとマークを見る。)

マーク サーチライトがついているかどうかが見たくてね。

ダフニ 何か怪しいもの、見付けた?

マーク (カーテンの間に頭を入れて。)

さっきの電話でちょっと気になることがあったもんだから。思った通り、何もなしよ。(窓から戻って来る。)

(マークが次の料理を用意している間、ダフニ、鋭くマークを見つめる。)

ダフニ 私、さっき分かったって言ったけど、ただ分かっただけじゃないわ。これはもう決定よ。

(マーク、少し奇妙な表情で振り向く。)

マーク 決定? 何だい、それは?

ダフニ あなたは三十二歳。軍服を着ていない。彫刻家だつて逃れられない筈よ、兵役は。それにとにかく彫刻だけで食べていけるなんて、あり得ないわ。

マーク そうかな。彫刻だけでやって行ける人もいるぞ。例えばロダンはどうだ?

ダフニ ロダンがシャンペンにキャビア?

(マーク、ダフニの前に料理を置く。)

マーク そろそろ。

ダフニ(軽蔑的に。)

何言ってるの! 芸術家の生活って私、知ってるわ。こんなじゃないの。違う。あなた、私に隠していることがあるのよ。あ、慌てなくていいの。私は大丈夫だから。

マーク そう。

ダフニ あなた、諜報部員ね。

マーク 諜報部員？

ダフニ（遮って。）いいの。言わなくて。本当のこと言っちゃいけないって、そのぐらい私にも分かってるわ。

マーク（問の後。）君はじゃあ、諜報部員はシャンペンにキャビアで暮らしてる、そう思ってるのか。

ダフニ そりゃそうよ。高給が支払われなくっちゃ。だって危険がいっぱい・・・そうでしょう？

マーク（軽く。）そうかな。そんなに危険が多いかな。職業って、どんなものでも危険なんだ。それと同程度なんじゃないか。

ダフニ まさか！ 大変な筈よ。私、知ってる。でもスリル満点。すごいでしょうね。（畏怖の念でマークを見つめる。）

マーク ねえ君、それ、全然手をつけてないよ。

ダフニ 駄目。もう駄目よ。何も入らない。興奮すると私、何時でもこうなの。すぐ胃に来ちゃうの。

マーク ああ、それは悪かった。（立ち上がってダフニの方に進む。悪いことをした、という気持。）ねえ君、思い切ってこれだけは言うておきたいんだ・・・

ダフニ（耳に指で栓をして。）駄目、言っちゃ駄目。だってそれ、悪いことだもの。あなた、撃ち殺されるわ、そんなことしたら。

（マーク、ダフニを見下ろす。本気で言っているのか、疑いの気持。ダフニ、見上げて微笑む。マーク、優しく耳から指をはずしてやる。）

マーク 大丈夫だ、耳に栓なんかしなくても。これから言うことは違うんだから。いいかい？ 僕はね、君が世界で一番魅力的で素敵な人だと思ってるんだ。そして、もし君が許してさえくれれば、僕は君を好きに、大好きになっってみせるよ。

ダフニ（優しく。）いい台詞だね。

（ダフニ、目を閉じ、後頭部を椅子の背につけ、キスを受ける姿勢。マーク、キス。最初優しく、次に温かく。）

マーク（呟く。）ダフニ・・・可愛いダフニ・・・

（窓に突然鋭い音がする。投げた石が窓ガラスに当たる音。）

マーク 何だ？

ダフニ 窓に石が当たったみたい。

（通りから、「おーい」という声がする。）

ダフニ 外で誰かが怒鳴ってるわ。（立ち上がる。）

声（舞台裏で。）おーい！

（マーク、部屋を横切って、窓のところへ行く。）

マーク 何だ。どうしたんだ。

声（舞台裏から。）誰かいるだろう？

マーク 何だって？

声（舞台裏から。）僕はダフニ・プレントイスを捜してるんだ。

マーク 聞こえないな。

（マーク、カーテンを開け、窓を開ける。空はもう暗くなっている。）

マーク（窓から外へ。）何の用だ。

声（甲高い、コックニーのアクセントで。）ベルは鳴らし

たんだ、何度も。だけど、誰も出て来やしない。

マーク 何だ君は。うろつろつするんじゃない。早く行っちゃえ。

声（舞台裏で。）ダフニ、いるのか、ダフ！ おい、姉さん！

ダフニ あら、大変。シドニーだ。

マーク シドニー？ 誰なんだ。

ダフニ 弟。あら、まあ。どつしたのかしら。ライトさん、あの子入れてやれない？

マーク それはまあ。

（マーク、窓によりかかる。）

マーク いいか。受けるよ。

（マーク、鍵束を投げる。）

マーク 大きいやつが一階の鍵だ。上がって来て、ここは

二階の二号室だからな。

シドニー（舞台裏で。）オーケー。

ダフニ まあ、何かしら。一体何が起こったのかしら。

マーク ここに夕食を食べに来たんじゃないだろうな、まさか。

ダフニ さあ。夕食は知らないけど、家に誰もいなくなっ
て淋しくなったのかな。

マーク やれやれ。

ダフニ あの子偉いのよ。年の割には賢いの。今は軍需工場
で働いているわ。

マーク そつ。（玄関の扉がボタンと音を立てる。）あ、来た。

ダフニ きつとあの子のこと、気に入るわよ。

マーク うん、まあね。

（マーク、扉を開ける。シドニー登場。マークに鍵束を返す。それからダフニの方を向く。）

ダフニ シドニー、お前何してるの、こんな所で。

シドニー パパが帰ってさ。ママが急に家に帰ったんだ。

帰ると思っちゃいなかったんだ、こっちは。そして例のギヤアギヤアを……

ダフニ（怒って）まあ、ママったら。酷いわ。またギヤア

ギヤア？ いつも通りの？

シドニー それがひどいんだ。パパに食ってかかってね。

「あんたがちゃんと監視しないからいけないのよ。この儘ほつ

としてごらん、あの子はメイベル叔母さんみたいに売春婦に

なつちまうんだから」つて。

ダフニ お黙り、シドニー。（急に家族の一員としての義

務に気付いて。）ああ、ライトさん、ご免なさい。家庭内の

口喧嘩、分かって下さるわね。（シドニーの方を振り向く。

口調、変わる。）いいわね、シドニー、ママのところに今す

ぐ帰って言うの。パパもママも何の心配もいらんだからつ

て。私は大丈夫なんだからつて。だけどほら、夕食が終わつ

てないの。ね？ 終わつたらすぐ帰る。終わるまでは帰りま

せんつて。

シドニー だけど僕は待つてて、一緒に帰らなきゃ駄目つ

て、ママに言われたんだ。

ダフニ そんなの馬鹿なことよ。ライトさんがちゃんと家

まで送つて下さるんだから……ね、ライトさん？

マーク 勿論。

シドニー 送ってもらっても駄目だって、ママは言ってる。この間ペニーフェザーさんが家まで送ってくれた時のことを考えるって。

ダフニ 何よ、シドニー、それ！（マークの方を見て。）ライトさん、私、何て言ってもいいか分からないわ。ご免なさい。私、帰った方がいいみたい。

マーク えーと、どうかな、こういうの。良い考えと思うんだが。その・・・シドニーに、帰ってパパとママに言ってお貰うんだ。住所がよく分からなかったって。

シドニー だってそれ、嘘じゃないか。
マーク ちょっと君、嘘も方便だ。想像力を働かしてくれなきゃ。

ダフニ 私、やっぱり帰った方がいいと思う。あーあ、いやになっちゃうわね。本当にご免なさい。帽子を取って来るわ。（寝室に行く。）

マーク そつ？ 君がそう思うんじゃないよ。じゃ、シドニー、行ってタクシーを拾って来て。

シドニー タクシー？ 何のために。

マーク 姉さんを家に送るためじゃないか。

シドニー 誰がその金を払うんだ。

マーク それは私に決まっているだろう。

シドニー どうして。

マーク（シドニーを玄関の外に連れ出しながら。）どうしてもこうしてもないだろう。こういうエチケットの問題は深遠なんだ。さあ、行ってとにかくタクシーを拾って来てくれ。

そこを右に曲がって、次にまた右に曲がる。その角で待つてると来るから。

（ダフニ、寝室から登場。マーク、玄関から再び登場。）

マーク 今シドニーにタクシーを頼んだから。

ダフニ（心配そうに。）シドニー、さっきペニーフェザーさんなんて言ったけど、あれ、本気に取らないでね。

マーク 何言ってるんだ、ダフニ。ペニーフェザーさんなんて、今問題じゃないよ。安心して。今夜こんなにちぐはぐなことになっちゃうって、僕は残念でたまらないんだよ。

ダフニ ええ・・・でもまた何時か。ね？ 大丈夫な時ね？

マーク うんそうだ。また何時か。今度がある。

（マーク、ダフニにキス。）

マーク シドニーのやつ！

ダフニ いけないのはシドニーじゃないわ。ママよ。ママのやつって言わなくちゃ。

マーク ママには会ってないからな。顔を見たシドニーの方にあたりたいね。（扉に進み。）台所に行って来る。使っている男にちよつと出て来るって書いておいてやらなきゃ。

（扉のところ。）タクシーは二台頼んだ方がいいかな。一台は僕達、一台はシドニー。変かな。

ダフニ ちょっと変ね。

マーク だけど一台だと、シドニーを屋根に上げとかなきゃならないぞ。それも変だよ。

（マーク退場。扉は開けた儘。）

（一人残ってダフニ、溜息をつき、ソファに坐り、嫌々帽子

を被る。玄関の扉がボタンと開き、非常に存在感のある女（イースル）登場。ひどく肌が露出しているイヴニングドレス。異国風の顔。明らかに自分で鍵を開け、入って来たらしい。何故なら部屋に入りながら、鍵をバッグに入れていたから。イースル、陽気にダフニに頭を軽く下げる挨拶。ダフニ、この時までには、この予期せぬ闖入者に驚いて立ち上がった（いる。）

イースル 暑いわね。

ダフニ ええ、本当に・・・蒸すわ・・・

（後を続けようとするが、声が飲み込まれてしまう。イースルが慣れた様子で戸棚に進み、開け、そこからウイスキーとコップを取り出したからである。イースル、コップに三分のウイスキーを注ぎ、小指を少し曲げてヴェールを上げる。次に、あつという間の早業で、一息にウイスキーを飲み干す。その儘の姿勢で数秒間顔色を変えずじつと立った儘、味を楽しんでいる様子。それからダフニに罎を丁寧差し出す。）

イースル（眉を挨拶のためにぐつと上げて。）一杯どう？

ダフニ ええ・・・私、いいわ。

（イースル、「そう？」というように頷き、もう一杯、たっぷり注ぐ。それを今度はすぐは飲まず、手に持った儘、暖炉の方に進む。箱から煙草を一本取り、火をつけようとする。）

ダフニ あのー、ちょっとお訊きしていいかしら・・・あなた、だーれ？

イースル（次のことだけ言えば全ては明らかと言わんばかりに。）イースル。

ダフニ あら、そう。でも悪いけどもう少し御自分のことを説明して下さいませんか。苗字は？

イースル（暫く考えて。）あるわ。

ダフニ 何？ もしお訊きするのが失礼でなければ。

イースル スケフィントン・リヴァーズ・・・だったと思う。ええ、きつとそうよ。（また一息にウイスキーを飲む。コップと罎を戸棚に戻す。それから寢室の扉に進む。自分の言っていることは当然相手に分かっているという調子で。）

あの人、ボルネオに行ったんだって。（イースル、微かにダフニに微笑み、寢室に退場。）

ダフニ（あつげにとられて。）何、一体！

（マーク、玄関ホールから登場。）

マーク さて、これでよしと。

ダフニ ねえ、ライトさん。あなたって奇妙なお友達をお持ちね。変わってる。

マーク そうかい？

ダフニ 今寢室に入って行った女の人がいるけど、あれ、誰？

マーク 寢室に？ 誰か入ったの？

ダフニ ええ。それだけじゃないわ。まるでここの住人みたいな顔をして・・・ここの鍵も持ってたわ。

マーク で、その人、名前を言った？

ダフニ ええ。苗字には自信なかったみたい。でも名前の方は自信ありそうだったわ。イースルだって。

マーク イースル イースル、ね。（急に事情が分かって。）そうか、イースルか！（対策を考えつくまでに間あり。それ

から笑う。) そんなの、説明は簡単だよ。イスルなんて僕の友達じゃない。会ったこともないよ。

ダフニ じゃ、どうしてこのアパートを我がもの顔に歩き回るの? それにあなたのウイスキーだって勝手に飲んだのよ。

マーク それはオスカー・フィリップソンの友達だよ。オスカーは僕の友人でね。休暇になると、よくここに泊まりに来るんだ。どうやらその女にあいつ、鍵を渡したらいいな。ダフニ それは随分迂闊なことじゃない? でもそのオスカーっていう人、今は休暇じゃないんでしょ?

マーク うん。休暇じゃないんだ。だけど・・・

(マーク、言葉切る。その時玄関ホールに音がする。)
オスカー (舞台裏で。) ああ、荷物はそこ。中に入れなくていい。そこに立てかけといて。手伝いの男に後はやらせる。じゃあ、どうも有難う。

(玄関を閉める音がする。)

マーク どうやら錯覚っていうやつが一番良い見本らしいよ、これは。オスカー・フィリップソンは休暇中なんだ。

(オスカー登場。マークより三歳上。コールドストリーム・ガードの大尉の制服を着ている。)

オスカー (驚いて。) ハロー、マーク。えらい親切だな、お迎えとは。どうして分かった。

マーク 分かつちやいなかったんだ。それが問題さ。

(二人、握手する。)

マーク (厳しく。) どうしてウイリアムズに言っておかなかったんだ。

オスカー えっ? 言っといたがな。

マーク 言っていないだよ、このアホ。だいたい何を考えてるんだ、休暇になったことを誰にも知らせないで、急に真夜中に帰って来たりして。

オスカー 真夜中? 真夜中とは違うな。今八時三十五分だ。丁度。それにイスルにはちゃんと電報を打つといたぞ。あいつまだなのか?

マーク 来てる。あそこだ。

オスカー そうか。
マーク だけどイスルにだけ電報を打つてのはどういふんだい。僕にはなしが。

オスカー まあ、こう言っちゃあ何だが、六箇月暫壕暮らしなんだ。最初はイスルとの夜の方が陽気がいいと思ってるね。

マーク 成程。あ、そつだ、紹介しよう。ミス・プレンティス・・・フィリップソン大尉。

オスカー (「おお、なかなか美人だ」という表情。) 始めて。
ダフニ 始めまして。

マーク (相手にこちらの状況を説明する意図で、慎重に。) ミス・プレンティスと僕は一緒に夕食を取っていたところでね・・・この僕のアパートで。

オスカー 君のアバ・・・
マーク (しっかりと。) オスカーの言葉を遮って。) ところ

がこの人、この私のアパートがこのほかに気に入ってくれてね。そつだ、ダフニ。

ダフニ ええ。素敵なアパートだね。

オスカー 成程。

マーク それで僕の言っていたのは、ミス・プレンティスと僕は一緒に夕食を取っていた、この僕の……

オスカー アパートだね。うん、そこまでは分かった。

マーク そして丁度今さっき、君の話になつていたところなんだ。休暇になると必ず君はここに泊まりに来るんだって。

オスカー 成程。泊まりに来るね。

マーク それで、君が大事なこの部屋の鍵をイスルみたいな女に預けるといふのは、ちよつと軽率なんじゃないかって、この人が言うもんだから、僕は言った……いや、言おうと思つていた……つまり、君と僕とはイートン以来の親しい友人なんだから……それに実際、僕が彫刻家になつたというの、君の一言があつたからなんだ……

オスカー（注意深く聴きながら。）成程。僕が君に一言ね。よく覚えていろよ。

マーク 君はいつだって僕の彫刻の腕を褒めてくれた。そうだな？

オスカー そう、君の腕をね。

マーク 彼はね、僕にこう言ってくれたことがあるんだ……マーク・ライト、この名前が有名になる日がいつか来るだろう。通りで人々が僕に行き合う。すると人々は肘をつつきあつて、「ほら、マーク・ライトだ……彫刻家の」、そう言うだろうってね。

オスカー（ゆつくりと。話を了解して。）そして、このアパート、ウイルブラム・テラス十二番の玄関には看板が立

つだろう。「彫刻家マーク・ライト、嘗てこのアパートに住む」とね。

マーク そうだよ。君はそう言つたんだ。

オスカー そうだろうな。さてと、一杯やつていいかな。

マーク 一杯？ ああ、勿論だ、オスカー。自分の家だと思つていいんだからな、このアパート。まあ、こんなこと、態々言うことはないが。

オスカー いや、御親切、いたみいろよ。

（イスル、寢室から登場。）

オスカー ああ、イスル。嬉しいよ。また会えて。

（イスル、微かな、また堂々とした微笑。片頬を差し出し、オスカーにキスさせる。彼の姉といった態度。）

オスカー このお二人に、もう会つてるね、君。

イスル 女の人の方はね。男の人はこれが全くの初めて。

オスカー そうか。こちらはマーク・ライト。有名な彫刻家だ。こちら、イスル。イスル！ いい考えが浮かんだよ。暑いよね、今夜は。女性二人でちよつと庭に出てみたらどうだ？

マーク な、オスカー、実はこの人と僕、丁度出ようとしていたところなんだ。この人の弟がタクシーを拾いに出いてね……

オスカー（状況が分からない。）この人の弟？

マーク そう。弟。シドニーっていうんだ。

オスカー ふーん、弟ね。まあいいじゃないか、その話は

あとで。ミス・プレンティス、こいつが何を言おうと、僕とイスルは君達二人を追い出すように返す訳にはいかないか

らね。だいたい今日は休暇の第一日目じゃないか。もう少しはいて、シャンペン一杯飲むぐらいのことはしなくちゃ。さあ、イースル、この人を庭に案内して。満月だ。奇麗だよ。

(マークに。) いいだろう？ マーク。

マーク うん。いい考えだ。最高だ。

ダフニ でもそんな暇ある？ シドニー、今すぐでも戻って来るわよ。

マーク タクシーを待たせておくさ。実はねダフニ、(声を低めて。) オスカーと大事な話があるんだ・・・例の内密の。

ダフニ(何のことか分かって。) あ、内密のね。(オスカーを指さして。) あの人も例の？・・・

マーク そう。例のだ。

オスカー 例の？ 何の？

ダフニ いいのよ、とぼけなくて、フィリップスン大尉。

マークは何も言っていないんですからね。それは私、保証するわ。

オスカー あ、それを聞いて安心したよ。

ダフニ(イースルに。) じゃ、行きましょつか。えと・・・

あなた。庭を見に行きましょう。

(女二人、寝室に進む。)

イースル お先にどうぞ。

(ダフニ、礼儀を守り、躊躇する。)

イースル いいえ、本当にどうぞ。

(ダフニ、先に退場。イースル 後に続く。オスカー、ちょっとマークを見た後、二人の後を追う。)

オスカー(舞台裏で。) イースル、ちょっと話がある。

(暫くしてオスカー、再び登場。)

オスカー イースルにこの持主が変わったことを知らせておいた方がいいと思つてね。さてと、本題に入る前に、まづ「例の」何なのかを知っておかなきゃな。何なんだ？ 例の？

マーク 諜報部員だ。

オスカー ええっ？ 彫刻家じゃないのか？

マーク 諜報で彫刻。

オスカー ほほう、そりゃすごい。能ある鷹は爪を隠していたわけだ。その調子だと、ひよつとすると、実は映画の大スター、ゴルフの世界チャンピオン、世界的クラシックバレエの名手だったなんてことになるんじゃないのか。

マーク いや、冗談は止めだ、この際。どうだ？ あの娘。

オスカー 魅力的だ。またシルヴィアだな。(ブロンズを指さす。)

マーク そう。驚くべく似てる。な？

オスカー そう。驚くべき追っかけだよ。あの顔と見るや、誰でもいい、一直線。逃がしはしない、ときてる。まさか本当に恋しているんじゃないだろうな、あの娘に。

マーク おいおい、オスカー、そりゃあの娘は魅力的だ。だけど遊びだ。本気の恋愛じゃない。

オスカー 災難が待ち受けているんだぞ、君には。それを考えるとぞっとするよ。だいたい君は感情の面では幼稚園を卒業していない。いや、卒業しようとしていないんだ。十七歳の時に会った女がまだ忘れられない。自分が何か、君には

分かっていゝのか、マーク。君はピーター・パンなんだ、感情的には。

マーク いいじゃないか、ピーター・パンで。感情的に幼稚園、大歓迎だ。感情的大人よりずっと良い。

オスカー 結婚以来七年間、ずっと忠実な夫。それがここにきて突然色事師か。そつだ、それじゃ色事師だ。

マーク いいじゃないか、色事師。

オスカー 君にはその才能がないんだよ。悪いことは言わない。忠実な夫に戻った方がいい。ややこしくて、危険な色事師、この仕事はこつちに任せておいてくれればいいんだ。練達の独身者にね。

マーク 既婚者の邪魔は許さん、という訳か。

オスカー 馬鹿なことを。既婚者と競争、大歓迎だ。連中が泥沼に嵌まつて行くのを見るのは楽しいからね。

マーク 泥沼などないよ、オスカー。僕は君と違つて、色魔でも放蕩でもない。ただのロマンティストだ。僕はこのロマンティックな気分には自由な風を当ててやりたいんだ。

オスカー で、このダフニ・ブレンティス嬢とはどこまで行つたんだい。

マーク 行くも何もないよ。彼女のママのおかげでね。ママの機嫌が悪いのさ。

オスカー ママの機嫌ね。そいつはことだぞ。パパの機嫌ならまだしも、ママの機嫌は最悪だ。

マーク 邪魔になんかなるもんか。ママぐらいちゃんと始末するさ。

オスカー 始末？ 笑わせてはいけないよ、とうしろつ君。

この道でママの始末ぐらい難しいものはないんだ。複雑で危険なんだぞ。一体この今の場合、君は何か対策を立てたのか？

マーク いや、何もまだ。

オスカー 何もまだね。よし、君がそれだけ火遊びの決心が固まつているなら、ひとつ僕が手本を見せてやろう。あの子の電話番号は？

マーク 知らない。

オスカー 知らない！ 呆れたもんだ。（窓に石が当たる音。）えっ？ 何だあれは。

マーク シドニーだ。用がある時は何時もあれだ。

オスカー いくつぐらいの子なんだ。

マーク 十五歳かな、見たところ。（窓際へ行き。）おい、シドニーか？

シドニー（舞台裏で。）おい。

マーク そつだな、やつぱり。いいか、受けるんだぞ。

（マーク、鍵束を投げる。）

オスカー さ、君は女達とあつちへ行つて。シドニーは僕に任せるんだ。

マーク 任せる？

オスカー そつだ。シドニーは僕がうまくやる。

マーク うまくやる？

オスカー いいから任せておけつたら。どんな奴だ？ シドニー。

マーク ああ、君には気に入る筈だ。頭がよくつて。軍需工場で働いてるつて・・・（扉の開く音がする。）あ、入つ

て来た！（マーク、寢室へ進む。丁度そのあとにシドニー登場。）

オスカー ああ、シドニー、タクシーはつかまったか？

シドニー さつきから僕はベルの鳴らし続けた。今も三分は鳴らしていたな。ここの家のもんは、ベルには知らん振りをするのか。それともみんなつんぼなのか。

オスカー なかなかうまくいこと言っじゃないか。な、シドニー、二、三リング儲けたいと思わないか。

シドニー 何しろって言うんだ。

オスカー 口にチャックをするんだ。それでいい。

シドニー あんた、誰なんだ。

オスカー 誰でもいいだろう？ どうだ、シドニー。

シドニー（間の後。）五シルだ。

オスカー 三シル六ペンス。それ以上は駄目だ。

シドニー 五シルだ。

オスカー 分かった分かった。よし、五シルだ。漁夫の利つてやつか。商売のうまい奴だ。いいか、今からまっすぐ家に帰って、親父さんに言うんだ。アパートは確かに見つかった。だけどベルを、鳴らしても鳴らしても、誰も出て来やしない。それだけを言うんだ。これは嘘じゃないからな。それに親父さんにこの話で通すって、面白いじゃないか。分かったな。

シドニー 五シルは？

オスカー ほら。

シドニー うまく行った！ さいなら。（退場。）

オスカー（追い掛けるように怒鳴る。）そいつで煙草でも買っただろう。その煙草でニコチン中毒にでもかかっちゃまえ！

（オスカー、窓のところへ行く。）

オスカー おい、タクシー。

（この時までにマークと二人の女、部屋に入ってきて来ている。）

イースル それからその子、すっかり変わっちゃったのよ。

オスカー（タクシーの運転手に。）ちょっと待っててくれ。今すぐ出る。

マーク そつ？（イースルへの返事。）

イースル 本当に、すつかり。

オスカー ああ、ミス・ブレンティス。マークから聞いた？

これから四人でサヴォイに行こう。そしてダンスでもしようって。

ダフニ ああ、残念だけど私駄目。家で私のこと、待つてるの。

オスカー 家の問題はすぐなんとかするさ。家の電話番号²は？ ミス・ブレンティス？

ダフニ ベイズ・ウオーター四三〇二。一階の新聞販売店の番号。そこから呼び出しなの。

オスカー ああ、分かった。（受話器に。）ハロー。ベイズ・ウオーター四三〇二を頼む。

ダフニ（マークに。驚いて。）どうしよう・・・電話なんかして。面倒なことになるわ。いやだわ。

マーク 任せておけばいい。こういうことには慣れているんだ、彼は。

オスカー ちょっと嘘が混ざっている話をするけど、気にしないで、ミス・ブレンティス。

ダフニ 嘘・・・いやだわ。

オスカー（受話器に。）呼び出しを頼みたいんだが。ミシズ・ブレンティスを。．．．ああ、頼む。

ダフニ でもサヴォイにしよう？ この服では行けないわ。

オスカー 着るものなんて何とでもなるさ。イースル、お前よ行き、ちよつと大きなやつ持つてるだろつ？

イースル 大き過ぎるかも知れないけど。

オスカー うん、君の服は大きくなるさ、僕の休暇がきれるずつと前にね。（受話器に。）ああ、ミシズ・ブレンティス？ こちら、准将のメイスンだがね。いや、お会いしたことはない、残念ながら。ただ、私の友人のマーク・ライト．．．名前はお聞きになったことがありの筈だが．．．彫刻家の．．．彼があなたの娘さんを私のアパートに連れて来てね。私が小さなパーティーを開いたもんだから。．．．えっ？ 帰つて来た？．．．ああ、そりや多分息子さん、ライトのアパートのベルを鳴らしていたんだな、それは。だから返事なんかありつこない。そりや、私がベルを鳴らしてたつて同じことだったでしような。ハツハツハ。可哀相に、シドニー。それは悪いことをした。．．．それは駄目ですな、ミシズ・ブレンティス。今返すなんて、そんな。随分楽しそうにしていらつしやるんですよ、娘さん。今丁度、オスカー・フィリップスンが歌つところ。．．．オスカー・フィリップスン。ほら、有名なバリトンの．．．そう。それから娘さんにどうしても会つて欲しい人物がいるんです。暫くしたら来ることになつてゐるんですがね。名前はきつとお聞きになつてゐると思ひますよ。セント・ネオッツ卿、外務省の。

（マーク、ギョツとなる。ダフニ、ゲラゲラ笑つ。）

オスカー 彼に会つておくつてのは娘さんにとつていいことじゃないかと思つんですがね。．．．ああ、お許しになる。

それはそれは、ミシズ・ブレンティス。一時間ほどで必ずお返しますから。．．．ええ。．．．娘さんと話したい？ いいですよ。では。．．．

（ダフニ、どきまぎしている様子。オスカーから受話器を受け取る。）

ダフニ（受話器に。）ハロー、ママ。．．．ええ、ここ楽しいわ。．．．ええ、あの人素敵。．．．ええ、そうよ、ママ。女の人と話していたの。素敵なお女の人よ。名前は。．．．

エー。．．．ミシズ・ウイニントン・ピゴット。．．．だつたと思つ。仲良しになつたわ、私達。．．．ええ、ママ。分かつたわ。．．．チェリオ。お休みなさい。（ダフニ、電話を

切る。ほつと安心の溜息をつく。オスカーに。）すごいわ、大尉さん、あなたつて。本当にすごい腕。ママがあんなに機嫌がいいの、私、見たことがないわ。

オスカー（気楽な調子。）どうつてことはないよ。本当にどうつてことない。

（オスカー、マークと目が合う。マークの目、オスカーを睨んでゐる。）

ダフニ それに何、あの変な名前。なんとか卿つていうの。

オスカー セント・ネオッツ卿。そうだ、どうしてかな、この名前がボンと口から出てしまった。何なんだろう。さあ、

女性軍はタクシーに乗つて、イースルのアパートで着替え。三十分後にサヴォイで落ち合つんだ、いいな？

三十分後にサヴォイで落ち合つんだ、いいな？

ダフニ まあ、素敵。素敵！どきどきするわ。行きましよう、イスル。(自分の荷物をまとめ、扉の方に突進する。イスルはそれほど熱心な様子なく、後に続く。)

イスル どんな格好にする？

ダフニ 格好はいいわ、どうでも。とにかく私に入るのがあるかどうか、それが問題よ。でもまあシンプルなものがいいわ。そんなのある？

イスル シンプルっていうもの、私、あまり買わないから。でもそうね、金属をちりばめたサテンの服があったわ。真紅の。首の形が清純なのよ……

(二人の声小さくなり、玄関の扉が閉まる音。)

マーク(爆発するように。僕が感情的には幼稚園だなんていうさっきの話、あれはみんなナンセンスだ。結婚して七年も経ってみる。神秘的と名のつくものは一切合財、影も形もなくなつて、今までだつて、何時大爆発が起こつていても不思議じゃない状態なんだ。そしてその後は破局だ。しかしな、オスカー、僕は安全弁を発見したぞ。二重生活だ。名案だろう、オスカー。実に名案だ。どうしてなんだ、これをおい付く人間は多くないよに見えるな。何故なんだ。

オスカー いくらでもいるんだよ、思い付く奴は。どうやら君は、夕刊の日曜版は読んでいないようだな。

マーク そうだ、オスカー。君、このアパートにいくら払つてる？

オスカー 年二百五十。

マーク 家具つきで年五百。僕に譲らないか。

オスカー いやだよ。

マーク なら、七百五十だ。

オスカー その辺で止めとけ。うん、と言いつつ。

マーク 八百。

オスカー 酷いことになるぞ、マーク。それこそ破局だ。新聞の見出しが見えるようだ。「子爵の愛の巢発覚。信じられないこの事実」。キャロラインのことを考えてみるよ。それにデニスのことを。(調子が変わつて。)ウイリアムもいるのか。

マーク うん。

オスカー じゃ、もう二百だ。

マーク 千だな。よし、これで成立だ。

オスカー やれやれ。いいか、マーク、僕は好んでやったんじゃないからな、この取引。僕の貧困がさせたんだ。ヴェニス商人だ。

マーク いや、ロミオとジュリエットだ。勿論泊まりたい時は君、何時でもここに泊まればいい。

オスカー 真面目な話、なあ、マーク。お説教じみたことを言うのはいやなんだが……うまく行きつこないんだ。二つの生活をうまく働かせるなんて、出来つこない。二つは早晩衝突して、両方とも木端微塵になるんだ。そりゃ僕は、マーク・ライトが吹き飛ばされるのは一向に構わないがね。マーク・セント・ネッツ卿が粉々になるのは見ていられないんだ。

マーク 必ず衝突するなんて限つちやいない。僕は二つの生活を厳然と区別するさ。

オスカー そいつは無理だ。必ずしつぺ返しが来る。そう

いうものなんだ、世間でやつは。この言葉、よく覚えておいた方がいい。

マーク トマス・ハーディーの登場人物みたいなことを言うな。えっ？ あれは何だ。（立ち上がり、扉の方に進む。その途中で立ち止る。）

（観客にも今や聞こえる。ヒューツという音と共に爆発音。遠くに叫び声。外の通りではつきりと、「危ないぞ、避難しろ！」と怒鳴る声がする。）

オスカー ツエッペリンだ。

マーク 一体何だ、これは。選りに選って今夜！ デニスの祈りが効いたのか。

オスカー 何をぶつぶつ言ってるんだ。

マーク オスカー、頼む、必ず後でサヴォイに行く。今は家に帰らなきゃならん。

オスカー 家に？ どうしたんだ、一体。

マーク 今は説明する時間がない。デニスが危ないんだ。

オスカー 危ない？ デニスに爆弾が当たるのを君が助けるっていうのか。

マーク 危ないのは爆弾じゃないんだ。キャロラインの親父だよ。変なお祈りをするからだとか、神への冒瀆だとか、デニスの奴、酷い目に会つぞ。走って帰らなきゃ。オスカー、頼む。僕が家で捕まって出られなくなったら、ダフニによるしく言ってくれ。明日必ず電話するから。（マーク、半分扉から出ている。その時、オスカーが笑っているのに気付く。）何を笑ってるんだ。

オスカー 厳然と分離した二つの生活か。

マーク これはな、いいか、オスカー。偶然なんだ。独立事象だ。純粋な独立事象なんだ。こんなことで何かが分かってたまるか。（オスカー、笑い止らず。）くそつたれ！（マーク、部屋を跳びだす。）

（幕）

第二幕

（場 同じ。幕が上がる前から、小規模のジャズバンドの音が聞こえる。この時代の流行りの曲（Makin' Whoopee）。幕が上がり、その音は階下でパーティーをやっているためのものだと分かる。曲と共に、パーティーの人数が聞こえてくるからである。）

（年は一九二九年。春のある日。六時三十分頃。）

（一九一七年以来この部屋は少し変化あり。新しいカーテン、それに家具類のカバーに、女性の影響が窺える。（おそらく「ジャズスクール」の。）そして家具の配置替えにより、嘗ての独身者の生活の厳しさが全くとれている。）

（幕が上がるとうイリアムズ・・・第一幕より十五歳年をとっているが、嘗てと同様、きちんと青いサージの服を、それに白い上着・・・が、電話をかけている。呼び出しがすむまで、階下のメロディー、Makin' Whoopeeを口ずさんでいる。）

ウイリアムズ スローン七八三七？・・・こちら、外務省。レイディー・ピンフィールドをお願いします。・・・ああ、レイディー・ピンフィールド。こちら、外務省です。・・・実は・・・

（扉が開き、女の子（バブルズ）登場。非常に短いスカート。

髪形はボーイッシュ。)

バブルズ(この部屋でいいのか、自信なさそうに。)ハロー？
ウイリアムズ(鋭く。)おい、あんた。ここは違つよ、この部屋は。パーティーは下のスタジオだ。ほら、ドアを閉めて！(受話器の口に手で蓋をする。)

バブルズ ネアンデルタール人！(退場。扉を後ろ手に閉めて、何かぶつくさ言う声。)

ウイリアムズ(受話器に。)失礼しました、レイディー・ピンフィールド。・・・急なお知らせで申し訳ないのですが、電話が入りまして・・・いえ、御主人様にです。急なことで、御本人がお電話する時間がありません。すぐチエルトナムへお発ちになりました。・・・チエルトナムです。・・・二、三日の予定です。・・・さあ、それは。私はただの事務の者です。でも多分軍縮会議に関わることはないかと・・・はい。・・・いえ、電話番号はその、マル秘事項です。・・・勿論急用でしたら御伝言致しますが・・・ええ、それはもう。・・・はい、それは出来るだけやってみます。・・・はい、ではすぐにそちらにお電話を、と。では失礼致します、レイディー・ピンフィールド。

(バブルズ、扉のところに登場。)

バブルズ ハロー。私達どこかで会ってない？

ウイリアムズ さっき私は言っただろう？ あんた。パーティーは下なんだ。

バブルズ 分かつてるわよ。だって下に行ってみただも
の。最高、下のパーティー。でもウオツカがないのよ。

ウイリアムズ 分かつた分かつた。おとなしく下に戻って

くれれば、私が一纏買つて来てやるから・・・だけどな、あんた、パーティー客はここには来ないことになつてゐるんだ。いいね。

バブルズ (ウイリアムズに抱き付いて。)ネアンデルタール人、素敵！(キスする。)それに何か怪しい雰囲気。あそこなに？(寝室を指さして。)寝室だわ、きつと。

ウイリアムズ ミス・パタスが着替えをしている最中。悪いことは言わない、下へ行って・・・

バブルズ 構わない、構わない。(寝室のドアを開ける。)
ノラ、天使ちゃん。ハラハラドキドキのパーティーね。あなた、どうしてまだなの。

ノラ(舞台裏で。)あっちに行って、バブルズ。今やつと下塗りなんだから。

バブルズ ねえ、天使ちゃん。私にちょっとベッド使わせてよ。私、頭が痛い。ちよつと横になったら治るんだけど。
ノラ いつもの手じゃないの、それ。まあいいわ。じゃ、入つて。

バブルズ やつぱり天使ちゃんだわ！(ウイリアムズに。)
じゃあね、あなた、バイバイね。ありがとさん。

(バブルズ、寝室に退場。ウイリアムズ、困つたもんだ、というように溜息。サイドボードまで行き、盆を取る。オスカー登場。平服を着ていて、非常に上品に見える。但し胸のあたり、肥つて一回り大きくなつてゐる。)

オスカー(片手を差し出して。)ハロー、ウイリアムズ。
ウイリアムズ お帰りなさい、大佐殿。

オスカー 暫くだったな、ウイリアムズ。

ウイリアムズ 調子は如何でありますか、大佐殿。

オスカー いや、好調だ、ウイリアムズ。実に好調だ。

ウイリアムズ そのようにお見受け致します。腰のあたりも一回り大きくなって・・・違つてありますか。

オスカー いや、それは違つ。(本能的に腹を引き締める。)

ウイリアムズ いえ、でも、ちよつとこのあたり。(胃のところを指差す。)

オスカー 馬鹿なことを言うな。目の錯覚だ。丁度光線の具合が悪い。この位置がいかん。(オスカー、帽子とステッキを窓のところにあるテーブルに置く。)さて、パーティーはどこなんだ。

ウイリアムズ この二階へ上がる前にお気がつかれた筈であります。あの音で。

オスカー あの大騒ぎがそつなのか。

ウイリアムズ さようであります。スタジオでパーティーであります。

オスカー スタジオ?

ウイリアムズ はあ。ここだけでなく、下もお借り上げになり、そこをスタジオに。

オスカー 下も。驚いたな。で、スタジオつて一体何をするんだ。

ウイリアムズ さあ、多分彫刻をなさる為の部屋だと思われませんが、勿論ミス・パタソンの御発案です。なにしろミス・パタソンは芸術家肌で・・・あ、そつです。今はちゃんと職業にもついて・・・ストランド座の新しい芝居に役がつきましたから・・・

オスカー なあウイリアムズ。その女、どんな風なんだ。

ウイリアムズ はあ、その、自分はパリパリの現代つ子といふのは、よく分かりませんが・・・

オスカー しかし、どのくらいパリパリかに依るだろう。どうなんだ、この女は。

ウイリアムズ(パーティーから話し声に混じつてピアノの音が聞こえて来る。)パリパリという点ではみんな同じであります。ミス・パタソンも例外ではありません。第一、この彼女主催のパーティー、下で何をやらかしているか、分かつたもんでないであります。ボンベイ最期の日、と言いますか・・・あ、それで思い出したであります。もう自分は下に降りませんと・・・動きが取れなくなるであります。

オスカー 成程、突撃開始か。

ウイリアムズ は、正に突撃であります。それから、討死²⁷は厳禁。いらつしやいますか?

オスカー うん。行くとするか。(立ち止つて。)そつだ、待てよ。戦場に入る前に一つ。まだライト氏なんだな? ウイリアムズ。

ウイリアムズ はい。マーク・ライト。ウィルブラム・テラス十二、サヴェッジ・クラブ。これが名刺にある名前と住所です。

オスカー 呆れたね。マーク・ライトには、今や名刺があるのか。

ウイリアムズ はい。形式は全て踏んでおります。

(寢室の扉が蹴つて開けられ、ノラ登場。裸足。背中ของポタンを留めようとしながら。ウイリアムズより寢室の)

近くにいたオスカーに、背中を差し出して、ノラが言う。(

ノラ 留めるの、やって。私、届かないの。

オスカー お易い御用。(オスカー、留めにかかる。)

ノラ(ウイリアムズに。)ミス・フェアウエザーに濃いコーヒーを出して、ウイリアムズ。

ウイリアムズ ミス・フェアウエザー？ 誰ですか、それ。

ノラ あそこで伸びちゃってるの、ベッドの上で。(オスカーに。)バブルズったら可哀相に。あの子ウオツカしか飲めないっていうの、私、すっかり忘れてた。ジンを飲ませるとあの子、アルコールが頭に直行なの。

オスカー(まだボタンを留めている。)ははあ、すると、ウオツカだと何処に直行？

ノラ 知りたい？ 知りたくないわよね、そんなこと。

(オスカー、留め終わる。)

ノラ ありがとう。御親切に。

(ノラ、寢室に戻る。)

オスカー Tens, tens. (「チアン、チアン」 仏語 「おやおや」)

ウイリアムズ 全くで。

オスカー そうだ。そう言えば、ウイリアムズ、あの女の子はどうなったんだ。あの、例の、ミス・・何だったかな(名前は。)

ウイリアムズ ミス・ブリッグズですね。以前と変わらな
いであります。・・・ただちょっと旦那様のことをいろいろ
知りたがるようになって。・・旦那様に会いたいのさく・

・あとはいつもの伝で。

オスカー 「いつもの伝」は知っている。

ウイリアムズ 今では店を持って。帽子屋ですが。名前もダリアと。勿論旦那様がお買い与えになったもので。なかなかうまくやっているようです。仲もおよろしくて。ただ、仲のおよろしいのと、いい仲というのは、別物であります。当然でありますが。

オスカー それはそうだ、ウイリアムズ。そこを区別するというのが、この私の信条でもあるんだ。

(マーク登場。顔も体形もほとんど変化なし。ただ、少し髪が白くなっている。)

マーク 何を油売ってるんだ、ウイリアムズ。下ではてんでこ舞だぞ。やあ、オスカー。

オスカー ハロー、マーク。

ウイリアムズ 失礼しました。丁度今、ミス・フェアウエザーにコーヒーをと。・・・

マーク ミス・・誰だって？

ウイリアムズ 客の一人であります。・・・気分が悪くなつて、あそこで。・・・

マーク ああ。・・・そうだ、ウイリアムズ。下に変な奴が来てる。髪が白くて緒ら顔、それに鼻髭だ。大佐とか言っていたな。名前は分からない。そいつめ、私を部屋の向こうから「ハロー、ピンフィールド」と、大声で呼び掛けやがる。これにはまいるよ。何か手を使って追い出してくれ。シェイ

カーでも振り損なって水でも引つ掛けてやるんだ。
ウイリアムズ やって見ます、ミロード。

マーク それから・・・家には電話してくれただな？

ウイリアムズ はい、ミロード。必ず御自宅にお電話をと。急用とのことです、奥様から。

マーク 今日は私は何処に居ることになってるんだったかな？

ウイリアムズ チェルトナムであります、ミロード。

マーク そつか。市外に掛ける手順はどうだったかな、ウイリアムズ。

ウイリアムズ（オスカーの方を手で指し示すようにして。）大佐にまづ、お宅にかけて貰います。そして電話交換手の声で、「市外です。チェルトナムから」と言っ貰います。三秒おいて、クリック、クリックという音をさせて、次に御本人が出ます。

オスカー 市外で三分を越した時のピッピッピはどうするんだ。

ウイリアムズ 三分以内に話は収めた方がいいです。ピッピッピは危険であります。いつか自分は試したことがあります、奥様がおっしゃいました。「この電話機混線かしら。変な女がピーピー言っている声が聞こえるわ。」と。

（ウイリアムズ退場。）

マーク そうだ、オスカー、エジプトはどうだった。

オスカー とにかく、暑い。

マーク これでお役ご免か？

オスカー いやいや、ただの休暇。それも一箇月だけ。やれやれ。

マーク 何故あっさりと辞めてしまわないんだ。兵隊さん

なんかやってたって、将来はないぞ。我々外交官は、もう戦争なんか起こらないように努力しているんだからな。

オスカー おいおい、近衛は潰さないんだらう？ 僕は今近衛連隊に居るんだ。陸軍か何かみたいに言わんでくれ。

マーク おい、それはそうと、腹がえらい出て来たんじゃないか。

オスカー 出てる？ そんなことはない。見る！（腹を凹ませる。）

マーク するとほら、ここが出る。

（マーク、オスカーの広げた胸を指さす。確かにそう言えばそこが出ている。それからマーク、オスカーに近寄って、かなり真直な自分の腹を見せる。）

マーク 触って見るよ。

オスカー（触る。）当たり前じゃないか。コルセットで絞めていりゃあな。

マーク コルセットとは言わんのだ、これは。まあ、強いて言えば下着だ。三十五歳に達した男の健康を保つ為の、謂わば下着なんだ。

オスカー 三十五・・・と言った？

マーク そうだ。三十五だ。

オスカー やれやれ、マーク、それで通ると思っっているのか。しかし待てよ、君が三十五なら、僕は三十八だ。君より三歳上なんだからな。

マーク 四歳だ。

オスカー いや、三歳だ。今は三月だ。誕生日はまだだからな。驚いたね。僕だって、若く通そうと思っっているが、こ

れでも最低で四十二だ。それ以下ではやったことがない。

マーク そう。君にはそれぐらいが適当だよ。(電話に)ハロー、スローン七八三八を頼む。さて、そのへんのことにお互い納得したら、一つ君の得意な市外電話っていうやつのお手並を拝見したいな。

(オスカー、いやいや電話に近づく。)

オスカー 三十五ね。もう外交官になろうというでつかい息子がいてね。

マーク でつかくはない。それに外交官になるにはまだあと四年ある。まあ、あいつがその気になったら話だが。

オスカー (電話を指さして。)話し中だ。

マーク くそつ。あいつ誰と話してるんだ。

オスカー そりゃデニスとじゃないのか。デニス・・・あいつは切れる子だ。なにしろ僕が名付け親なんだからな。忘れちゃ困るぜ。

マーク 怠け者だよ、あいつは。今トゥールにいるんだ、フランスの。三箇月たつ。それなのに、一行だつてちゃんとしたフランス語で手紙が書けないんだ。それで書くことと言えば、下宿している家の娘が自分に惚れて困ってるよ。

オスカー へえー。それでシルヴィアはどうだ？ 僕の知らない内にもうシルヴィアを見付けたって言うんじゃないだろうな。

マーク いや、見付けた。嘆かわしいシルヴィアだ。なにしろ、アーシュラ・カルペパーなんだ。

オスカー アーシュラ・カルペパー？ やれやれ。

マーク 知ってるのか、君は、彼女を。勿論役者でない彼

女という意味でだが。

オスカー あの女を知らないですむという訳にはいくまい。これはちょっとデニスにお灸を据えないといかん。やれやれ、今時の子供ときたら、あんな女の一体どこが好いっていうんだ。

マーク どこがって、全部だろ。堀に落書きして、それでやつと表に出せるような言葉を、あの女は平気で、それも大声で喋るんだ。それが魅力なのさ。

オスカー シルヴィアとしては、まづい選択だな、確かに。

マーク まづいよ、実にまづい。今まで厳しくして来たんだが・・・あの調子じゃ、それも当然だが。これからはあの女に会うのは厳禁だ。

オスカー うん。あ、ところでマーク、昇進おめでとう。

マーク 有難う。どうして分かった。

オスカー ロンドナーズ・ダイヤリーに載ってたよ。読んでないのか。

マーク まだだ。何て書いてあった？

オスカー ビンフィールド卿 ラ・パス公使に任命さる。

マーク ふん。他には？

オスカー 他には別になかったと思う。

マーク (意地悪く。)別になかった、ね。これを読めば君の記憶も蘇るかな。(ポケットから新聞の切り抜きを取りだし、読む。)一九二六年以来ベルギー大使であり、その活躍により良く知られ、また、人気の高いビンフィールド侯爵は・・・

オスカー 読んでないと言ったじゃないか。

マーク ところが読んでいたのさ。「本日、その活躍に相応しい昇進を獲得した。」

オスカー (不機嫌に。) 分かった分かった。そうだったな。

マーク 次がどうなるか、覚えているか？

オスカー 痩せてるとか、何とか・・・

マーク 「すわりとして、ハンサムで、機知溢れるピンフィールド卿は、一九三三年、父親からこの称号を受け継ぎ・・・」

オスカー 分かった分かった。もう一度電話を掛けてみるからな。(受話器に進み。) スローン七八三八を頼む。もう一度だ。その担当の記者、君の友達なんだな。

マーク いや。一度も会ったことがない。(切り抜きをポケットに入れる。)

オスカー それに似た記事が出たことがあったな、僕にも。

マーク どんなやつだ。

オスカー 近衛連隊で最もハンサムな士官、だとか何だとか・・・とにかくこういう事を書かれるのはバツの悪いもんだよ。(急いで。) そつだ君、えーっと、何番だったかな・・・

(マークに教えられながら。) スローン七八三八・・・繋がった？ よし、どこからかって？・・・チェルトナム・・・そう、チェルトナムから。・・・お待ち下さい。

(マーク、オスカーを睨み付けながら(訳註 交換手としての言葉が下手だかららしい。)) 受話器を取る。(

オスカー (必死に擬音を出す。)) クリック、クリック。

マーク (囁き声で。) クリックは終だ。(問の後、受話器に。) ハロー・・・ハロー、キャロライン。・・・ちゃんと聞こえるか？・・・ああ、良く聞こえる。電話してくれて・・・

・何なんだ？・・・何？ 帰ってる？ 今どこにいるんだ・・・

・何故帰らせたりしたんだ、君は。・・・スクオツシユをやっているって？ そんなこと、してるもんか。ブルームズベリーのバーで飲んでるんだ。アーシュラ・カルペパーとね。それに彼女に金魚の糞みたいにくっついてる連中とね。

オスカー デニスのことか？

マーク そうだ。(受話器に。) それでどうなんだ。御夕食にはお帰り遊ばすのか。・・・ふん、そうは思わない？

そいつはよかった。・・・あの子が可哀相だ？ そりゃ可哀相さ。しかしそんなことをしたらあいつは勘当だ。そうなりや、もつと可哀相だぞ。・・・それで私に何をしろって言うんだ。

肩を優しくたたいてやって、「よくやった、デニス。外交官なんか辞めちまうんだな。いや、立派な息子を持ったよ。」¹

そう言うのか？・・・いや、こつちも手が離せないんだ。³

かし明日の朝一番で帰る。二、三時間でも。・・・いや、今夜は駄目だ。・・・駄目だ。それは全く不可能だ。いいか、あいつに言った。「そんなインタヴューなんか止めちまえ」、それから、「明日の朝一番でフランス行きの特符を買え」とね。・・・じゃあな。・・・頑固じじい？ 何を馬鹿なことを。・・・もしもし、もしもし。

(マーク、受話器を耳から外し、ゆっくりと置く。パーティーの音が聞こえる。)

マーク じじい？ この僕が？

オスカー 三十五歳でね。

マーク うるさい。(陰気に。)

オスカー さばりか？

デニスの奴め！

マーク 厭でたまらんらしい。役者になるっていうんだ。

オスカー へえー、演技が出来るのか？

マーク 出来っこないさ。

オスカー 何で分かる。

マーク 見たことがあるからな。

オスカー 何をやったのを。

マーク シャイロツクだ。

オスカー それで？

マーク 酷いもんだ。見ちゃいられなかった。

オスカー 合わない役だったんじゃないか？

マーク（食ってかかるように。）何だ？ あっちの肩を持つのか？

オスカー（急いで。）いや、そうじゃない。ただその・・・

どんな物事にも、両面があるからな。だろ？

マーク 誰が言ったんだ、そんな馬鹿なことを。

オスカー（悠々と。）誰って名前が残っちゃいないさ。まあ、一般に認められた定理っていうかな。

マーク くだらん定理だ。くそつ。学校で子供達に芝居なんかやらせるつてのは、一体どういう神経なんだ。親への反抗を薦めているようなもんじゃないか。

オスカー（思い出して。）学校で芝居か。俺もやったな。マクベス夫人だ。

マーク（意地悪く。）さぞかし御粗末極まるマクベス夫人だったろうな。観客は地獄の苦しみだ、多分。

オスカー（威厳をもって。）イトンの新聞ではなかなか好評だったな。押し出しも立派だし、雰囲気もあるし、と。

マーク その新聞、頭がおかしくなっていたのさ。

（扉が開き、ノラ登場。衣装、ひどく露なパーティー用ドレス。Dance Little Lady の曲が階下から聞こえる。）

ノラ ハロー、可愛い子ちゃん達。

マーク ハロー、可愛い子ちゃん。君、このオスカー・フィリップスは初めてだったよね。僕の古くからの親しい友人なんだ。

ノラ ええ、初めて。始めまして。

オスカー 本当のことを言つと、さっき会ったんだけど。

ノラ あら、そう？

オスカー 「留めるの」やったのは僕。・・・覚えてる？

ノラ あらま。上手な、慣れた手だったわ、そう言えば。

オスカー そう思った？ それは有難う。

ノラ あなたがあの人だったのね。よくマークから噂は聞いたわ。

オスカー こいつの言うこと、みんな真に受けちゃ駄目だよ。

ノラ それは大丈夫。今分かったから。噂で聞いてたあなたつて、年寄りでただ真面目なだけの人。でも実物はどう、夢の王子様だわ、まるで。

オスカー（喜んで。）夢の王子様？ 本当かい、君。

ノラ 本当、王子様その儘。でも私達こんなところで何をばやばやしてるの。どこかでパーティーがあるんじゃないの。それともそんなものないの？

マーク いや、ある。ある筈だよ。

ノラ あらあら、主人役が全然いなくて？ 伊達について

る名前じゃない筈よ、主人役。持ち場を離れるってどういうこと？ いけない人ね。

マーク 砲火に晒されて仕方なくだよ。嫌な奴が下にいてね。

ノラ 嫌な奴なんて何処にでもゴロゴロしてるでしょう？ 私に言わせれば嫌な奴だらけよ。この下にだけ少ないと思ったら大間違いなんじゃない？ さあ、降りましょう。社会的義務ってものを果たさなくっちゃ。

マーク あの大佐がいなくなるまでは駄目だね。オズカー、頼む。あいつまだいるか、下に行つて見て来てくれ。

オズカー うん。だけど、どんな奴なんだ。

マーク 緒ら顔、白い髪、白い髭、大きな声。間違えっこない。あのパーティーに一番相応しくない人物を捜しさえすればいいんだ。

オズカー（扉のところまで。）しかし、相応しいっていう方も分からんな。

マーク ウィンディーだ。あれが模範だ。（ウィンディーは不明。当時の漫画の主人公か。）

オズカー（ウィンディーのことを考えて。）頭が切れて、すらりとして、ハンサムで、ロンドンっ子か。（しかもめっ面をして退場。）

ノラ 何？ 今の。

マーク なーに、ちょっとした冗談でね。（ノラにキス。）
どうだい？ このところ。丸々三日間会わなかったね。

ノラ もつこの週末が待ち遠しくて、待ち遠しくて・・・
（衣装を見せて。）まだだったわ、感想。

マーク ははあ、新品の衣装か。
（ノラ、歩きまわって衣装を見せる。）

マーク うん、こいつはいい。

ノラ 値段もいいのよ。あなた、構う？

（マーク、微笑んでノラを見る。）

ノラ それとも、構わない？

マーク（抱きしめながら。）構わないさ。

ノラ あなたって大好き、ライトさん。（マークの両手を掴んで。）でもあなたって金持ちなのね、気遣いみたいに。

マーク 気遣いじゃないけど。

ノラ どこから入ってくるの？ まさか彫刻でなんて言うんじゃないでしょうね。

マーク まあね。もう一つの仕事もあるからね。

ノラ 諜報部員？ だけどあれの報酬って、安いものじゃない。まるでただよ。フロツシー・フィリップスをご覧なさいよ。

マーク フロツシー・フィリップス？

ノラ 女スパイ。知らないの？ あの関係では大事な女よ。ゼロゼロ・ファイヴとか何とか。格好いい名前つけちゃって。でもバス賃にも困る時があるってよ。だからあなたの場合、どこからお金が出てくるのかしら。私がこんなにかかっていのにへいちゃらって、不思議だわ。

マーク それ、構う？

ノラ 構わない、本当は。謎だわ、あなたって。でも心配しないで。いつか正体を見破っちゃうんだから。だけどあの話は何なの？ ラ・パースとかどこかに行っちゃうって。ど

こが狂ってるわ。

マーク 狂つても本当なんだ、それは。

ノラ でも何故ラ・パースになんか。

マーク 行く場所があつちが決めるんだ。こつちじゃないよ。

ノラ でもラ・パースだなんて。あんなどこ、地の果よ。そう、ベルギーはそんなに悪くなかつた。週末には帰れたもの。でもラ・パース！

マーク（優しく。）駄目かい？

ノラ 駄目駄目。行かないって言つてやるのよ。まあま、ラ・パース！ 諜報部員にあんなところで何の仕事があるって言うの？ ロンドンよ、仕事があるのは。言つておやりなさいよ、ロンドンに残りますつて。

マーク 言つたんだ。連中、聞かなくてね。

ノラ 「くそつ、俺は辞めた」つて言つてやるのよ。

マーク それも考えたんだが。

ノラ え？ 真面目に？

マーク うん。

ノラ 言つつもり？

マーク 分からない。決心があるな、これは。

ノラ 私、力になれるかしら、その決心の。

マーク うん。

ノラ どうやって？

マーク その目だよ、今僕を見てくれている。

ノラ シルヴィアみたいに？

マーク いや、シルヴィアじゃない。君その儘でいいんだ。

（間）

ノラ 私、もうパーティーに行かなくちゃ。そう思わない？

マーク うん、思う。だけど他にまだ思うことがあるな。君の今のその目つき、それを今夜遅くまた僕にするんだ。そのじつと僕を見つめるその目つきをね。（間の後マーク、ノラの向きを変えてやり、扉の方に向かせる。）

ノラ（扉のところで。）私、いいこと思いついたわ、ライトさん。どうしてこれに、もっと早く気がつかなかつたのかしら。

マーク いいこと？

ノラ フロツシー・フィリップスに頼むのよ。

マーク（激しく。）駄目だ、それだけはいかん！

ノラ だけどフロツシーから一言あればあなた、ロンドン駐在は確実なのよ。

マーク ねえ君、フロツシーから一言あれば、僕は一生豚箱だよ。駄目だ、ノラ。お志は有り難いがね。とにかくこんな話はしちやいけないことになつてるんだ。そんなこと一言でも話してご覧、僕は本当に酷いことになるんだ。分かつてくれ、ノラ。これは金輪際駄目なんだ。

ノラ 分かつた。言わない。でも条件があるわ。

マーク 何だい、条件で。

ノラ 知ってる筈よ。

（間）

マーク じゃあ一つ質問をする。これに真面目に答えてくれ。

ノラ いいわ。

マーク もし僕がその条件を満たしたら、君は僕の傍に一生いてくれる？

(間。)

ノラ ええ。

マーク 有難う。じゃあ僕もすぐ後に行く。

(ノラ、扉を開ける。下からのパーティーの音が入ってくる。)

ノラ (耳をすませて。) 何、あの音楽。まるでお葬式ね。バブルズに言つて、扇のダンスでもやらせなきゃ。・・・ただ、あの子、立つていられるかな。ねえ、ライトちゃん、早く降りて来るのよ。

(ノラ退場。ほとんど同時にバブルズ、纏れた髪に裸足の姿で、寝室の扉に現われる。眠そうに、開かない目を開けてマークを見ながら。)

バブルズ ウオッカはまだかな。ボンソンビー、遅いわ。

マーク (礼儀正しく。) ボンソンビーって誰？ それにウオッカなんて、何のため？

バブルズ 私がいい人。・・・私、知らない人とは口をきかない。

マーク どうしてこんなところにいるの、君？

バブルズ 知らないわ。(再び寝室に退場。扉を閉める。)

(オスカー、玄関扉から飛び込んで来る。)

オスカー (不安な面持ちで。) 驚いたよ、マーク。例の大佐って誰か知ってるか？

マーク 誰なんだ。

オスカー あいつはいかん。逃げるが勝た。

マーク どうしたんだ、一体。

オスカー 夫問題だ、情事の相手の。

マーク それなら身から出た錆だ。しかし原則に反するじゃないか。夫問題は起こさない主義だった筈だぞ。

オスカー 主義なんてあるものか、こんなことに。僕はただ勝手気儘にやっているだけだからな。カクテルを一杯、いいかな？

マーク カクテル？ ここで？

オスカー 下にはとても行けそうにないんでね。

マーク なるほど。そこにも何でも揃っている筈だ。僕にも一杯頼む。

オスカー (サイドボードに進みながら。) ウイルバーフォー スっていうんだ、あの大佐。運がよかったよ、見つからないで。馬鹿な奴がいたもんだ。僕があそこにいるって言い付けたい。「フィリップスン！ 青二才の色男め！ 貴様に話がある」と、大声で怒鳴りだしやがった。

マーク 青二才？ ああ、そうか。君の顔を敵はまだ見ていないんだな。

オスカー それでまた僕のユーモアのセンスを貶(けな)すんだな。あれ？ 氷がないぞ。

マーク 勿論ここには氷はないさ。

オスカー 僕の頃には氷はちゃんとあったぞ。「真空なんとか」と言っただな、あの入れ物。どうしたんだ、あれは。

マーク 自分で持つて行ったじゃないか。

オスカー ああ、そうだった。さてと、この我々の共通の敵、ウイルバーフォー殿についてだが、どうやら飛んだ誤解をしているらしい。ピラミッドからカイロ・オペラハウス

に行くタクシーの中で僕が、かの奥方に対して馴れ馴れしい行為に及んだとね。(カクテルを飲む。) うん、これはいける。氷なしの方がうまいくらいだ。

マーク その話のどこが誤解なんだい。

オスカー 全然違うさ。第一タクシーでなんかじゃない。

マーク ははあ、駱駝の上でか。

オスカー 駄目だ。ユーモアのセンス、二十点だ。綺麗な庭だった。月夜でね。それに「馴れ馴れしい行為に及んだ」んじゃない。先方に導かれたんだ。

マーク 成程。ところでこれに何を入れたんだ。(カクテルを少し舐めた後の台詞。)

オスカー 普通のジンとベルモットだ。レモンを効かせているからな。それで味が違うんだ。

マーク 何か変な味だな。・・・腐った大根のような。

オスカー 馬鹿な。うまいよ。

(オスカー、自分のを飲み干す。マークは置く。)

マーク オスカー、実は真面目な話がある。よく聴いてくれ。いいか?(オスカー頷く。) あの娘、どう思う?

オスカー あの娘? いいよ。なかなかいい。・・・勿論シルヴィアだ。一九二九年版のね。最新型だ。

マーク 今回はシルヴィアはなしなんだがな。

オスカー なしってことはないよ。今度もそっくりじゃないか。

マーク うん、そっくりはそっくりだ。しかしそれは関係ない。僕は思い出しに惚れちゃいない。ノラ・パタスンに惚れているんだ。

オスカー いつかはこんなことになると思っていたよ。ちゃんと僕は警告した筈だぜ。そうか、証拠の提出を求められるぞ、こいつは。

マーク 提出? 何だいそれは。

オスカー (サイドボードの方に行き、もう一杯カクテルを作る用意。) 離婚の法廷でだよ。

マーク 離婚? 誰が。

オスカー 君がだよ、勿論。

マーク メロドラマだな、まるで。誰が離婚なんて言った。

オスカー 君だよ。惚れてるって・・・

マーク そう。惚れてる。で、その程度なんだが、離婚までじゃない。外交官を辞めるまで、だ。

(間。)

オスカー *Tiens, tiens.* (チアン、チアン。仏語「あらまあ」)

マーク 何て言った?

オスカー *Tiens, tiens.* ってね。これはフランス語でね、

「まあ、止せよ。」という意味なんだ。(訳註 *Tiens* は原語に戻れば *tiens* で、「保て」の意。外交官のマークにはこのフランス語の知識は常識。)

マーク 他には何かないのか。

オスカー ある。あれは随分昔になるな。僕は丁度このソファに坐つて君に警告した。僕はよく覚えている。君の二つの世界はいつかは衝突して、両方とも木端微塵になるってね。

僕は言った。そりゃマーク・ライトの方が粉々になるのは一向に構いはしない。だけど、マーク・ピンフィールドが吹っ飛ばされるのは悲劇だ。破局だとね。いいかい?・・・変だ

な、こいつ。何か変なものを入れたみたいだ。(カクテルを指差す。)

マーク(自分のを啜って。)なあーんだ。やったな、こいつ。君はベルモットじゃなくて、ブランデーを入れたんだ。

オスカー 馬鹿な。僕がそんなへまをする筈が・・・(サイドボードに行く。これがジンだ。そしてこれが・・・(二番目の容器を嗅ぐ。怒って。)何だ、これは。ブランデーじゃないか。ベルモット入れに君はブランデーを入れたんだな。

マーク それはブランデー入れなんだ。ベルモット入れなんて聞いたことがないぞ。

オスカー 聞いたことがない? あるに決まってるじゃないか。現にここにあるのがそれだ。これに僕はいつもベルモットを入れていたんだ。

マーク 僕はブランデーを入れてたね。

オスカー そのお陰で一体僕はどうなったと思う。普段よりはずつと早い時間に酔っ払うだけじゃない、肝臓に強烈な一撃をくらってるんだ。(機嫌悪く。)何を話していたんだっ
たかな。

マーク 僕のことだ。外交官を辞める話。

オスカー そうだよ、破局だ。(驚いて。)そつだ、あの時も丁度この言葉を使っただぜ。

マーク 馬鹿なことだ。

オスカー(怒って。)言っただぞ、僕は。ちゃんと破局と。

マーク 言っただかも知れないがね。破局破局と繰り返して何になるんだ。それが馬鹿げていると言ってるんだ。

オスカー(陰気に。)今に分かるんだ、すぐにな。そつだ、もう一つ大事なことがあった。短い言葉だがな、これは君の心に浸透し、貫通するんだ。

マーク 浸透、貫通か。

オスカー まづ洞察だな。その後、浸透、貫通だ。

マーク ふん。言ってみろ。

オスカー デニスだ。君はデニスと同じだよ。

マーク デニス? あいつはまだ十八だ。何も分かつちやいない。だいたい自分の考えていることも分かつちやいないんだ。ところがこつちはちゃんと自分のやっていることは分かっているんだからな。

オスカー ふん。自覚のない自殺と自覚のある自殺の差か。

・おい、これ、なかなかの美文だったぞ。誰か聴いていてくれたら良かったな。

マーク 僕がちゃんと聴いていたさ。馬鹿な台詞だ。それにな、デニスは役者になると言っている。つまり自分でないものになりたいと言ってるんだ。が、一方この僕はだ・・・
オスカー ふん。僕の方は?

マーク 自分自身になるのさ。それ以上でもそれ以下でもない。彫刻に以前より少し身を入れて、少しものでも書いて、読まなきゃならなかった本を読んで・・・

オスカー ラ・パスで出来るじゃないか、そんなこと。

マーク だけどうしてラ・パスくんんだりでだ。それも人生の華っていうこの時期に。

オスカー すらりとして、ハンサムで機知溢れる・・・

マーク もういいよ、それは。僕はどうして自分自身をそ

んなどころに幽閉しなきゃならないんだ。ラ・パース。一旦あんなところへ行ったら何年も帰っては来られない。追放だ。辱められ、忘れられ、無視される。それもしょうくれた南アメリカの、ゴミの山の中にね。

オスカー ラ・パース、なかなか楽しい国じゃないか。

マーク 行つて来たことがあるんだな、すると。

オスカー いや。絵葉書を持つてるんだ。

マーク ラ・パース公使！ いいか、オスカー、ここで僕が譲るつてことは何を意味するか。それはこの十三年間、マーク・ライトを発明して以来、こういうものには負けまいと懸命になつて努力してきたもの全部に白旗を上げることなんだ。老けこんで、御身安泰だけを事とし、退屈で自分の地位を笠に着る男になることなんだ。まあいい。君の言う通りだ。二つの世界は衝突した。それがどうした。ピンフィールドを吹っ飛ばせばそれで終じやないか。それでライトを生かしておけばいい。ピンフィールドのような奴はいくらでもいる。もっともらしい顔をして、女房に飼ひ慣らされて、野心も何も無い退屈な男、そしてそのことに気付いてもいない、死んだも同然の男じゃないか。だけどライトは生きてる。生きる力を持つてゐる。そうだ、人生は大海原の大きな潮にのつて生きるものだ。どぶ池の臭い淀みにのつて生きるものじゃない。なあオスカー、僕は今、人生の岐路にある。誰にでも来るんだが、一生に一度しか来はしない。乾坤一擲の賭けをしなきゃならない。この賭けに勝つか負けるか、それが僕の後半生を決定するんだ。僕はもう態度は決めた。賭けはなされたんだ。明日僕は辞表を出す。

(オスカー、マークをじつと見つめてゐる。)

マーク 何か言うことがあるのか。

オスカー うん。興奮すると君、随分眉毛が動くんだね。

マーク 他にはないのか。

オスカー いや、ある。

マーク それは？

オスカー 悲劇だ。はきよ・・・いや、悲劇だ。

(ウイリアムズ、盆を持つて登場。盆の上にはコーヒーポット、ウオツカの罫、コーヒーカップあり。)

マーク 大佐はどうした。退散したか。

ウイリアムズ いえ。まだであります。御命令通りトマト

ジュースをぶつかけたであります。御自分が何をされたか、

お気づきにならない御様子で。

(ウイリアムズ、寝室の方へ行く。)

マーク どうしたら追い出せるんだ、一体。

(間の後、二人同時に名案を思い付く。それも同じ名案を。

二人、振り向き、シェイカーを見る。立ち上がり、サイドボードに進む。)

マーク 混合比は忘れてないな？

オスカー 忘れる訳がない、普通のドライマテニと同じだからな。(オスカー、カクテルを作る。前と同じ容器を使う。)

ジン二杯とベルモット一杯。ベルモットはもう少し効かせてと。けちけちすることはしない。それからレモンをちよつと絞つ

て・・・これが人生に華やかな味を添える。よしと。(ちよつと舐めて。)

うん、これだ。これを本物中の本物と言う。「夫撃退カクテル」、特許所有者フィリップスン、名前は

「ピンフィールド、やっかい払いカクテル」の方がいいかな。
(ウイリアムズ、寢室から出て来る。マーク、オスカーから
シェイカーを取り、ウイリアムズに渡す。)

マーク ああ、ウイリアムズ。これはウイルバーフォース
大佐用のカクテルだ。彼個人のためなんだからな。分かるな。

ウイリアムズ はい、ミロード。

マーク いいが、そいつをこぼすなよ。床に穴があくとま
づいからな。

オスカー 今寢室に運んだものは何なんだ、ウイリアムズ。

ウイリアムズ コーヒーとウオッカであります。下の客が
一人あそこへ。

オスカー ははあ、男か？

ウイリアムズ 女性であります。

オスカー 三十歳以下の？

ウイリアムズ はあ。

オスカー 名前は？

ウイリアムズ ミス・パタスンの呼び方ですと、慥か、バ
ブルズと。

オスカー バブルズ？ よし。もう一個カップを頼む。

(オスカー、寢室に入る。(訳註 ここですぐウイリアムズ、
持って行く。ウイリアムズが出て来た時マーク、ウイリアム
ズに言う。))

マーク いいな、ウイルバーフォース大佐がひっくり返っ
たら、タクシーに無理矢理押し込むんだ。それが終わったら
私に知らせろ。

ウイリアムズ 畏まりました、ミロード。

(ノラ登場)

ノラ あなた何やってるの。酷いわ。下では大騒ぎよ。み
んな怒鳴ってる。主人役を出せって。

マーク ねえ、ノラ。僕はまだちょっと降りられないんだ。
本当に無理なんだ。だけどウイリアムズが今からうまくやっ
てくれる予定だ。もう後二、三分の辛抱だよ。その間、頼
む。いいが、ウイリアムズ、頼んだぞ。

(マーク、ウイリアムズに頭の動きで行けと合図。ウイリア
ムズ退場。)

ノラ そうお。でも本当に二、三分よ。そうでないと下で
はマーク・ライトなんか架空の人物、いやしないんだって思っ
ちゃうわ。

マーク 架空の人物なんかじゃない。厳然として存在する
んだ。存在するだけじゃない、彼は一大決心をしたぞ。

ノラ ラ・パースは、無しなのね。

マーク そうだ、無しだ。

ノラ 有難う。これ以上言葉にならないわ。有難う。私、
下にもう戻らなきゃ。下に、どうしてもあなたに会わせろっ
てきかない人がいるの。私、あなたの彫刻を見せたの。そし
たらその人、ちゃんと知ってたのよ、あなたの彫刻を。

マーク (喜んで。)へえー。誰なんだろ？

ノラ 名前が難しいの。覚えられなくて。何とか子爵って
言ったわ。その人、アーシュラ・カルペパーと一緒に来たの。
ここに上げていい？

マーク (優しく。)あのね、その話で君に、二つ言ってお
きたい事があるんだ。一つはね、アーシュラ・カルペパーは

ご免だつていうこと。あの女はこのパーティーには呼ばないんだ。いいね。僕はあいつが大嫌いで……

ノラ あの人をしめだすなんて無理よ。だつてあの人、このパーティーの主役なのよ。そんなこと知らないから予めあなたに相談なんかしなかつたけど。で、二つ目のことつて？

マーク これはちよつと貴族の社会での習慣で、気障なことなんだが……君はいつも、こういうことはみんな知っておきたいと言つてたから……

ノラ そうよ。何なの？

マーク 普通僕等はね、何とか子爵なんて言わない。必ず何とか卿という……(恐ろしい考えが頭に浮かぶ。あたかも銃で撃たれたかのように言葉を切る。) 何子爵つて、君言つた？

ノラ セント……何とか。

マーク (苦しそくに。) アーシュラ・カルペパーとか？

ノラ そうよ。

マーク 歳は？

ノラ そうね。十八か十九かしら。

マーク そうか。(恐ろしい目つきで部屋を眺める。まるで窓から飛び降りようとしてもしているような。) ねえ君、僕が今突然散歩に出たら、ひどくまづいことになるかな。

ノラ 散歩？ 私のパーティーをどうするつもり？

マーク それは分かつてゐる。ただね、僕は時々パーティーとなると、急に閉所恐怖症になることがあつて……

(デニス登場。マーク、氷ついたようになり、言葉が続かない。)

ノラ この子よ、今話してた子。(デニスに。) あなた名前、もう一度言つてみて。

デニス セント・ネオッツ。

ノラ そう。そうだったわ。セント・ネオッツ子爵……あ、セント・ネオッツ卿よ、ライトさん。じゃあ二人で仲よくね。(マークに。) 私、下に行つて来るわ。(ノラ、マークの頬にキス。) さあ、もうさつさと降りて来るのよ。本当に素敵な恋人を皆にパーティーで見せびらかそうとしている時に、全然姿も見せないなんて、恥ずかしいわ。酷いことよ。

(ノラ退場。去つた後、永遠に続くかと思われる程の間あり。)

マーク (やつと。) 最近若い女の子の間には、ああいう馴れ馴れしい言い方が流行つているのかな。

デニス そのようですね。

マーク あれで連中、現代風だと思つてゐるんだ。そうだらう？

デニス そのようですね。(問。)(本当は古めかしいんですね。そうでしょうか？)

マーク そのようだね。(問。)(肌がえらい黒いじゃないか。

デニス 陽に焼いたんです。

マーク そのようだね。(問。)(なあデニス。見かけで判断しちやいかん。見かけでは騙されることが多いんだからな。

デニス はい、分かっています。

マーク お前が知つてゐるかどうか……まあ知らん筈だが……実はその、私はかなり以前から、その……政府の内密な仕事に携わつてゐる。これ以上このことについては

言えないが、その・・・私の言っていることはおよそ想像がつくな？

デニス ええ、およそ。

マーク よし。それならいい。ところでお前まさかここで私の本名を明かすようなことはしないだろうな。

デニス そんなことは。勿論。

マーク ミス・パタスンと私は古い友達なんだ。いいな。

昔からのだ。

デニス ええ。まあ、そうだろうと・・・

マーク いいか、その彼女でさえ、私の本当の正体は知らないんだ。

(オズカー、寝室の扉に現われる。バブルズに抱えられるようにして。)

オズカー 俺は妖精だ。俺の正体は妖精だったんだぞ。それにウオツカはな、最高だ。世界で最高のアルコールだぞ。

(真面目な顔をしているデニスと顔が合う。)

デニス 今日は、おじさん。

(間。)

オズカー (元氣よく。) やあやあ、デニス。えらい黒いな。

マーク 陽焼けにこれ努めたって訳だ。

オズカー なるほど。それで説明がつくな。なるほど、なるほど。(やや間があつて。) なるほど、なるほど。

バブルズ(オズカーに。) あなたその「なるほど」ってのはもういいわ。そんなの繰り返し言つて何になるの。それよりほら、私の首の後ろ、くすぐる、あれやつて。気持ちいいわ、あれ。

オズカー あー、ミス・フェアーウエザー。ちょっと悪いけど、またあつちに入つていてくれないか。(バブルズを寝室に押しやる。)

バブルズ 私のウオツカ、貸して。(ウオツカを受け取り、オズカーの頬にキス。)

オズカーの頬にキス。(女の子つて、一人でほうつて置かれるものじゃないのよ。(扉のところまで。) 待つてるんだからね私、あなたのこと待つてるのよ、本当に。

(バブルズ、寝室に退場。)

オズカー いや、驚いたね。最近の若い女の子つてのは随分馴れ馴れしい言い方をするもんだな。

マーク ああ、そうだな。

オズカー いや、驚いた。(また元氣よく。) ああ、デニス。こんなところで会うなんて、偶然だな。

デニス ええ、本当に。

オズカー (用心深く。) 親父さんに君、もう聞いたと思うけど、僕等偶々クラブで出くわしてね。丁度僕はライトという男が主催するパーティーに行こうと思つてたんで、親父さんを誘つたんだ。面白がるだろうと思つてね。それに僕は古

くからミス・パタスンを知つていて・・・親父さんは勿論彼女なんか知つてはいないよ・・・だからきつと・・・(言い止める。マークの顔を見て、何か具合が悪そうだと判断したからである。)

えーと、親父さんの話と違つかな？

デニス ええ、ちよつと。

オズカー (困つて。) どうしてかな。こういう話の筈なんだが。

マーク 話半分に聴くんだ、おじさんの言つ事は。カクテ

ルを作る時おじさん、調合を間違えてね。ベルモットの替わりにブランデーを入れたんだ。分かるだろう、その結果は。

デニス それはひどいです。その上にウオッカときては・・・ねえ、お父さん、こんなことになって僕、申し訳ないと思っています。わざとやったんじゃないんです、本当に。ただこのパーティーに来たら、ミス・パタソンがいろいろ彫刻を見せてくれて・・・そしたら勿論僕の見覚えのある彫刻です。変だな、このライトっていう男、お父さんの作品を騙っているのかって。だから彼に是非会って話をつけたいと・・・

マーク いいんだ、デニス。分かった、よく分かったよ。

デニス でも後で考えるとそんなの馬鹿なことだったんです。すぐに事情は分かっている筈だったんですから。

マーク 分かっている筈？ どういうことだい？

デニス ミス・パタソンを見ればすぐ分かることだったんですから。

マーク どうも分からんな。

デニス だってあの人の顔、シルヴィアなんですから。

マーク シルヴィア？

デニス お父さんがいつも彫る・・・十七歳の時に恋した女の人・・・

マーク 恋した？ 誰が。

デニス お父さんです。

マーク そんな事、言った覚えはないぞ、私は。

デニス あれぐらい話を聴けばそれぐらいすぐ想像つくでしょう？

マーク そうかな。私には分からん。

デニス おかしなものです。人って、だいたいいつも同じ顔に恋するものなんですね。

マーク そういうものらしいな。

デニス 固定観念の一種ですね、きつと。

マーク そうかな。

デニス ナルシシズムなんですよ。

マーク ナルシシズム？

デニス ええ。自分を愛しているんです、消え去った過去の自分を。

(オスカー、奇妙な声を出す。)

マーク(オスカーに向かって、怒って。)何か言ったか？

オスカー いや、ちよつとくしゃみを。

デニス だからお父さん、お父さんの恋しているのは十七歳の時の御自分なんです。

マーク そうかな。

デニス そうですよ。(明るく微笑んで。)でも心配なんかすることはありませんよ。

マーク それならいいんだが。

デニス 精神分析学者とか心理学者とか、そんなところへ行く必要はないっていうことですけど。

マーク それは有り難い。あれは高くつきそつだからな。

デニス 偶々僕、安くしてくれるところをウィグモア街にあるのを知っているんです。まあどうしても気になるっていうんでしたらの話ですけど。だけど本当、気にすることはありませんよ。固定観念なんて全くありふれたことですから。実際誰だって多少は持っているんです。

マーク 例えばこのオスカーでもか。

デニス ええ。非常によくその兆候が出ています。

オスカー そうか？

デニス 女の子の首の後ろをくすぐるなんて。子供の遊びですよ、これは。勿論厳密にフロイド的な意味です。

オスカー なあデニス、そのウイグモア街の男の住所、教えてくれないか。

デニス ここには持っていません。でもお父さん、本当に必要ありません。シルヴィアを捜すっていうのは全く害はないんですから。えーと、どうも僕、ここには邪魔したいですし、そろそろお暇（いとま）します。アーシュラを夕食に連れて行くと約束してますし……

マーク アーシュラ・カルペパーか？

デニス そうです。

（間あり。マーク、攻撃に移る構え。）

マーク あの女には二度と会うなとかたく言っておいた筈だがな。

オスカー（咳く。）「我、敵の攻勢にあへり。正面は破られ、側面もあやふし。我、反撃す。マーシャル・フォック。」

マーク（オスカーを睨みつけながら。）どうなんだ、デニス、私はそう言った筈だが。

デニス ええ。確かに。でも僕は約束はしませんでした。それに僕、この話はお父さんに賛成出来ません。

マーク ふん。賛成出来ない。しかし賛成した方が身のためだ。ロンドン中で最も悪名高い女と私の息子が付き合っている、などというのは実に好ましくないからな。

デニス あの人は悪名高くならざるを得ないんです。有名な女優なんですからね。素晴らしい女優でもあります。あの人のものを観たことがありますか、お父さん。

マーク 有り難いことに、その光栄に浴していないな。

デニス 変ですね、それは。ミス・パタスンが出て、好演している芝居に彼女も出ているんですから……

（間。）

オスカー 脇腹に隙があったようだな……見事な向かえ撃ちだ。

マーク（オスカーをぐつと睨んだ後。）考えはある女かも知れないがな、町の女の言葉を使う女なんだ、あれは。

デニス 分かっています、お父さん。あの馴れ馴れしさは止めた方がいいと、よく僕も彼女に言っているんです。でもそれは僕達がついさつき、ミス・パタスンについて言っていたことじゃないですか。⁴³

オスカー お見事。お突き一本！

マーク オスカー、君には部屋を出て行って貰わねばならないようだな。

オスカー 失敬。ウオツカが効き過ぎて……

マーク（デニスに。）暫くアーシュラ・カルペパーの話は置くとしよう。但し終わったんじゃないぞ。……デニス、私はお前の説明を求める。何の予告もなく、トゥールを飛び出してロンドンに帰る、これは一体どうしたことなんだね。

デニス すみません、お父さん。もうあそこには一秒も留まっているのは厭なんです。僕はこれで三箇月あそこにいきましたが……

マーク この三箇月間で、どれだけのフランス語を君が学んだか訊きたいものだね。Dites-moi quelque chose en français.

(仏語 「何かフランス語で言ってみるんだ。」)

デニス Que voulez-vous que jedis? (「どんなことを言えて言つんですか」但し、次に指摘される文法上の誤りあり。)

マーク (勝ち誇って。) ディーズだ。Que jedis. 接続法だぞ。それに何ていう発音だ。

オスカー おお、かすりだ。勿論一本にはならない。しかし、確かにかすったぞ。

マーク (憤然となつて。) オスカー・・・静かにしてくれ。

デニス でもお父さん、今さら僕がフランス語を勉強したつて、しようがないでしょう? だって僕、役者になるつて決めたんですから。

マーク ふん、決めた。決めたね、役者になると。

(ノラ登場。)

ノラ 戴いた帽子、被りに来たの。皆に見せようと思つて。(寢室に進む。) 何してるの、ここで。三人揃つて。

マーク 別に。何も。

ノラ あなた、今すぐ下に降りなきゃ、私怒るわよ。本当は私、今日はどうしても怒りたくないんだけど。だってあなた、諦めて下さつたんですものね今日、あの嫌なラ・パース行きを。

マーク あー、そのことについては、また後で話そう。

(ノラ、寢室に退場。)

デニス(父親を責める口調。) お父さん! お父さんは外交官を辞めるんですか。

(間。)

オスカー (マークに。) また逆襲だぞ。これは一時撤退した方が良さそうだが、マーク。

マーク オスカー、今すぐここを出るんだ!

オスカー うん、そうしようと思つていたところだ。言われなくてもね。とにかくこれは見ちゃいられない。

(ウィルバーフォース大佐の陽気な顔が扉に現われる。オスカー、慌てて部屋の隅に行き、絵を眺めている振り。)

ウィルバーフォース ああ、ピンフィールド、こんなところに隠れていたのか。まあ無理もないな。酷いパーティーだ。

マーク そうか。酷いかな。

ウィルバーフォース うんざりだ。全くうんざりしてるんだ。勿論妻が来なきゃ、わしだつて来はしなかつたんだが。

あいつ、芝居に出たもんだからな。(デニスを見て。) ああ、これは君の息子じゃないか。

マーク うん。

ウィルバーフォース そうだろうな。さっき親父さんにくつてかかった所を見たよ。いかんぞ、あれは。親父にとつてはかなりな打撃だ。うん。妻の話だが、あの芝居、トプシー・ターヴェーに出ていたんだ。あれは見たんだらう? 最後に出て来て、「あら、パーシー卿の正体はあなただつたの? まあ。」という台詞を言う役だつたんだが、覚えてるかい?

マーク 勿論。

ウィルバーフォース そうか。で、台詞は聞こえたかい?

マーク そりゃもつ、はつきりと。

ウィルバーフォース いや、聞き取れないつて言つ連中も

いるもんだから。勿論わたしはその判断は無理だ。台詞を知っているからな。

マーク うん、なるほど。それは・・・

(オスカー、見たところ非常に引きつけられている様子で絵を眺めている。ウイルバーフォース、少し疑いの目付きでそれを見る。)

ウイルバーフォース ここにフィリップスンという名前の男はいないかな。とんだくわせものなんだが。

(これをオスカーに向かって言う。オスカー、曖昧に首を振る。)

ウイルバーフォース このパーティーに来てるって聞いたんだがな。そいつにわしは一言話がある。何が何でも言わなきゃならん。

(少しの間の後デニス、前に出て。)

デニス 御紹介します。こちら、メイスン連隊長。こちら
はウイルバー・・・

ウイルバーフォース ウイルバーフォースです。始めまして。連隊長にしては随分若いな。

オスカー 皆がそう言ってるね。
(通りで女の歌っている声。しゃがれた大声。酔っ払っている。)

ウイルバーフォース あ、ちょっと失礼。妻の声らしい。
(窓へ進み。)やはりそうか。これは驚いた。酒なんか飲んだことがないんだが。精々パーティーでわしのグラスを取って舐める程度なのに。

マーク ほほう、舐める程度。あなたのグラスから。

ウイルバーフォース そうだ。何が何だかさっぱり分からんな。(窓から。妻に向かって。)おーい、わしだ。おーい、
ヨーツホー。(女の声がする。これに答える声。)おーい、
お前。そこにいるのはウイリアムズか。

ウイリアムズ(舞台裏で。)はい。ウイリアムズです。

ウイルバーフォース 頼む、ウイリアムズ。抑えておいてくれ。(女の抵抗する声が聞こえる。)逃がすなよ。あ、そのタクシーに詰め込むんだ。(タクシーの扉の閉まる音がする。それから沈黙。)無事詰め込み完了。芝居ではこういうのかな。ウイリアムズがやってくれたか。有り難い。(デニスに。)や、失敬した、君。正義感もいいが、父親に怒鳴るのはまづい。この次に会う時はなしたぞ。失礼、連隊長。
失敬、ピンフィールド。会えて良かった。

(ノラ、寢室から登場。)

ウイルバーフォース おやおや、これはこれは。女御主人役、ここにおられましたか。わしは丁度退散するところで。

ノラ あら、もうお帰り？

ウイルバーフォース ちょっとベティの奴が酔っ払ってね。何だか訳の分からん話なんだが・・・まあ、失敬。好いパーティーだった。主人役の男に会っていないのが心残りだが、まあ代わりによくと言っておいてくれ。

ノラ 主人役の男？ ほら、(マークを指さして。)今言ったらどう？

ウイルバーフォース 何だって？ ピンフィールド、ピンフィールドが主人役？ こいつはいいや。いや、最高だ。じゃあみんな、わしは失敬する。そうだ、ピンフィールド、ラ。

パース公使就任、おめでとう。いい地位じゃないか。素晴らしいよ。じゃあな。(退場。その後、残った四人に深い沈黙を残して。)

ノラ ねえ、私、あなたを問い詰めたなどと思つてはいないよ。でも……

(間。マーク、諦めたように咳払いする。)

マーク ちよつとね、ノラ、これから僕の言う台詞は、君の出た芝居のトブシー・ターヴィーに似てるんだが、つまり、私はマーク・ライトじゃなくてピンフィールドでね。ここにいるのは私の息子、デニスなんだ。

ノラ(一番驚いた点を捉え。)息子?(ノラ、デニスを見、次にまたマークを見る。)まあ、これがあなたなの? 無理だわ。

マーク いや、年も嘘だった。私は三十五じゃなくて、四十四なんだ。

ノラ まあ。三つぐらいならまだ許せるわ。でも九つ!

やり過ぎだわ。まるで嘘みたい。信じられないわ。まあ、これが人生っていうものかしらね。でもゆっくり話してなんかいられないわ。パーティーが……私、下に降りなくっちゃ。

(扉に進む。)あ、そうそう、皆さん、こういうことにちよつと興味をお持ちかも知れませんかから申し上げますけど、私、実はアマリア皇女ですわ、ボトルバークの。そしてバブルズ・フェアウエザー……今まで私の名前だつて言つてましたこれは、母なんですの。あのフェアウエザー大公妃。

(ノラ退場。長い間。)

オスカー(やつと。) Tiens, tiens.

(マーク、深く椅子に坐る。頭を両手で抱える。)

オスカー(再び。) Tiens, tiens.

(デニス、マークの椅子に近づく。マーク、見上げてデニスを睨みつける。)

デニス お父さん、僕、お父さんに言うことがあるんだけど。いいかな。(マーク、見上げ、黙っている。)

これ、僕なんかの言うことじゃないつて分かつてるけど、でもお父さん、外交官を辞めちゃうのはまづいよ。(非常に誠意を込めて。)

僕今、お父さんの気持、分かる。辛いだろうなつて思う。本当に。だけど、今まであんな立派な経歴だつたじゃない。ね? 今になつてそれ全部捨てちゃうのつて、僕は損だと思う。(マーク、まだ何も言わない。少し心を動かされた様子。)

……僕と一緒に食事しない? 今夜、ね、お父さん。

マーク アーシユラ・カルペパーと約束があるんじゃないのか。

デニス いいんだ、あれは。またにする。あつちも気にしやしないし。ね、お父さん。

マーク 私にも先約がある。

デニス またに出来ない? ねえ、僕のクラブに行くつて。料理はたいしたことはないけど、ゆっくり話が出来ると、決して邪魔は入らない。ちよつと僕、下に行つて来る。アーシユラに説明するんだ。ね、いいね、お父さん。

(間。)

マーク どうか、デニス。どうしたものか。辞めといった方がいいんじゃないか。

デニス（陽気に。） まあ、とにかく僕、アーシュラに言うて来るよ。すぐ上がって来るからね。（デニス退場。）

（オスカー、じつとこの成り行きを見ていたが、ここでマークを見る。マークもオスカーを。マーク、ゆっくりと立ち上がり、玄関ホールに行き、再び戻って来る。帽子を被り、手袋、コートは手に持って。オスカー、コートを着るのを手伝う。黙った儘。マーク、ゆっくりと玄関ホールに進む。）

オスカー マーク。

マーク 何だい。

オスカー イギリス外交の痛手だね、デニスが外交官にならないのは。

マーク 痛手？（オスカーの言った意味が分かるまでに数秒を要する。） いいか、オスカー、私が賛成するとも思っているのか。あいつがちょっとでもそんなこと思ってみる……（デニス登場。）

デニス タクシーを呼んでおいたから。

マーク（デニスの方を向いて。怒って。） いいんだな、デニス、この夕食はお前にとって楽しいものにはならないぞ。いいんだな。私は相当強い言葉を言わねばならんのだ。

デニス はい、お父さん。

マーク 役者！ 何を考えてるんだ、一体。お前が役者になれるだなんて、一体どこのどいつが考えてるんだ。

デニス 僕以外の誰が考えてるか、それは分かりません。でも僕はなれると思ってるんです。それだけです。

マーク お前は私の名前を継ぐことになっているんだ。お

前はそのことを忘れたのか。

デニス 忘れてはいません。役者には芸名があります。僕はそのを、デニス・ライトとするつもりなんです。

（間。オスカー、両手を空中に投げだすように上げる。）

オスカー やったー！ これは急所にぐさりだ。立ち直る余地なしだな。停戦要求あるのみだ、マーク。停戦の要求だ。

（マーク、威嚇するようにオスカーに近づく。）

マーク こいつ、殴り飛ばして窓からほうりだすぞ。

オスカー いいよ。さあ、どうぞ。

マーク（声、怒りで締め付けられる。） 肥りやがって、豚のように。それも出来はしないや。（急にデニスの方を向いて。） いいか、デニス、そんな馬鹿は出来ないんだ。世の中には逆立ちしたって出来ないことがあるんだ、いいな。そんなことが可能だなんて、ちょっとでも考えてみる、いいか、4
その考え自体が大間違いなんだ。

（二人が玄関ホールに着くまでに、幕が降りる。）

第三幕

（場 同じ。時 一九五〇年。）

（部屋はもう一度模様替えがされている。どちらかというところ、一幕の独身者の部屋に戻っている。ただ、ところどころに愛の巢（一九五〇年版の）にしたかったが失敗した、形跡が見える。それも住人の育ちの良さが邪魔をした結果であるらしいことが見てとれる。）

（冬の午後六時頃。幕が開くとウイリアムズが電話をかけている。夕食のためにテーブルの上に四人分のナイフ、フォーク

ク類が置かれてある。料理はどうやら牡蛎のみ。それにシャ
ンペンであるらしい。ラジオはEasy Lineのテーマを流して
いる。）

ウイリアムズ（電話に。）スローン七八三八？・・・カン
リップを頼む。・・・ああ、カンリップか。私だ。今日の話
を言うからな。鉛筆あるか。・・・ああ、書きとらなきや駄
目だね。・・・いいか、（ゆつくりと書き取らせる。）私は
クラブの執事だ、今日は。・・・そうだ。・・・旦那様はこ
こ。・・・つまりクラブで夕食。フィリップスン大将と一緒
だ。・・・そう、その方が楽だ。それは後にくる。・・・分
かったな、いいか。・・・クラブで大将と夕食、デニスさん
の初舞台にまつすぐ行つて、そこでベイズウオーター卿と会
う。それから陸軍大臣・・・陸軍だよ・・・芝居がはねてか
らベイズウオーター卿宅へ食事に。十二時三十分頃帰宅の予
定・・・そう・・・まてよ、一時の方が安全だな・・・そう
だ、これを訊かなきゃ。奥様のお風邪の具合は？・・・ああ、
大分いい？・・・おひるには起きられたつて？ うん、旦那
様に話しておく。安心されるだろう。で、あれはうまくやつ
たか？ そうか。そうそう・・・よし、じゃあな。（ウイリ
アムズ、電話を切る。）

（ドリスとクロウイー、一緒に話しながら登場。ドリスは鍵
をバッグに仕舞っている。二人ともイヴニングドレス姿。モ
デルのような歩き方。実際二人はモデル。ドリスは一九五〇
年版のシルヴィア。クロウイーは美人。彫像のよう。）

ドリス だから私、奥さんに言つてやったのよ。私、お昼
の休み時間が一時間で足りるって思ったこと、一度もありま

せんわ。それに、私が十分遅れたからつて、このお店が潰れ
るつてわけじゃないでしょうつて。（ウイリアムズに。）今
晩は、ウイリアムズ。この人クロウイー。・・・ウイリアム
ズよ。この子もフアビアの売り子。

ウイリアムズ（クロウイーに。）これは・・・始めまして。
クロウイー 今晚は。

ドリス あの子も連れて来てつて言われたのは、ついさつ
きだったのよ。この子親切だつて思わない？ パーティーを
盛り上げる為だけに、来てくれたの。それにデートもあつ
たのよ、他の男の人と。

クロウイー それは違う。ママと。

ドリス あら、ママとだった？ いいわね。（ウイリアム
ズに。）ライトさんったら、あんなにぎりぎりになつて電話
を下さるんですもの、私達、何の用意をする暇もなかつたわ。
48

二人とも酷い格好・・・

ウイリアムズ 酷いなんて、そんな。御立派なお支度で。
それにこちらさまも豪華絢爛。お二人ともただ見ているだけ
で目の保養ですよ。

ドリス 私達ただ慌てて洋服をひっかけて来ただけ。ね、
クロウイー？

クロウイー ええ、そう。ただそこらに転がつてたのをそ
の儘巻きつけて来たの。きつと酷い格好・・・

（二人、こう話しながら、ドリスの方は部屋を横切つてテ
ブルに進む。満足のいく着飾り方をして、自分でも

それに自信がある女のとる、ゆつくりした、堂々たる足取り。
クロウイーも同様。王女でもあるかのような優美

さと威厳をもって椅子に坐る。)

ドリス(テーブルの上のものを眺めて。)(牡蛎だわ。あなた、牡蛎好き? クロウイー。)

クロウイー あんまり。あなたはどつ? ドリス。

ウイリアムズ(クロウイーに。)(すみませんね。お気に召さなくて。でもあるものというところだけで。お芝居の前の軽い食事ですから。お許し願います。芝居がはねた後には勿論・・・)

クロウイー(仕方ないという声。)(そうね、これしかないっていうんじゃない・・・)

ドリス それ、何を読んでいるの、ウイリアムズ。

ウイリアムズ トレヴェリアンの「人間の歴史」ですけど。

ドリス どうしてそんなもの読むの?

ウイリアムズ 面白いんです。それにいろいろ教えられまして。さてと、私はそろそろ退散します。デニスさんを見に行くんです。オールド・ヴィック座というのがまた、分かり難い場所ですね。

ドリス で、誰と一緒に?

ウイリアムズ それはもう、私一人で。

ドリス 女嫌いなものね、あなた。

ウイリアムズ 年を取り過ぎましたよ。好きだったこともありましたよ。勿論・・・場所柄を弁(わきま)える女ならね。

ドリス 女の場合柄・・・それ、どつ?

(ウイリアムズ、答の代わりにただ微笑。)

ウイリアムズ ではこれで。皆さん、失礼しますよ。(退

場。)

クロウイー(物憂い調子。)(何だったっけ、出し物。

ドリス 慥か、ジュリアス・シーザーよ、シェイクスピアの。

クロウイー(がっかりして。)(シェイクスピア? あなた最初からそう言ってた?

ドリス その筈よ。きつと良いわよ。シェイクスピアって大抵いいんだから。時々、はつと驚くようなことがあるわ。

クロウイー 私、この間観た。あんなの嫌いだわ。ほら、この間ウエザービーさんが連れて行ってくれたようなの。

ドリス あれはシェイクスピアじゃなかったわ。最近書かれたものよ、あれ。ウエザービーさん、そう言ってたわ。それに書いた人、まだ生きてるって。

クロウイー あれ、最近のものじゃないわよ。だって詩で書かれていた。それに登場人物は皆中世の衣装を着ていたわ。

ドリス 詩で書かれていたって、衣装が古くたって、現代の芝居つてのがあるのよ。書いた人が生きてれば現代なの。

クロウイー ま、いいけど、どうでも。とにかくあれ、ちつとも分からなかったわ、私。

ドリス(辛抱強く。)(私も。ひとつことも分からなかった。でも、だからシェイクスピアってことにはならないわ。

クロウイー(諦めて。)(分かったわ。でもとにかく今夜のはシェイクスピアだって教えてくれた方が良かった。だって私、どうしていたか分からないわ。

ドリス そうね。あなたのことだからさつさと断わってたかも知れないわね。でも私、出るのはデニス・ライトよって

言う。そしたら・・・

クロウイー でも、ジュリアス・シーザーにでしよう？
(恐ろしいことに気がついて。) えっ？ これ紀元前じゃない？

ドリス どうしてそんなに紀元前を気にするの。紀元前だって、面白いものは面白いわよ。少しはこんなのも観なくちゃ。

クロウイー デニスは何になるの？ シーザー？

ドリス 違う・・・と思う。慥か、「友よ、ローマ市民よ。同胞諸君。耳を貸して戴きたい」という人よ。

クロウイー (少し明るくなつて。) ああ、それがある芝居？ 私知ってるわ、それ。そこところ、聴き逃さないようにする。ライトさんて、デニス・ライトのお父さんだつて言つたわね？

ドリス そうよ。マーク・ライトさん。本当はピンフィールド卿なんだけど・・・

クロウイー まあ！

ドリス パリ駐在、英国の大使。

クロウイー あらあら。

ドリス だけど、それ知らない振りするのよ。いいわね？
あのお爺さん、ただのライトさんだつて思われてるのが好きなの。

クロウイー どうして？

ドリス どうしてかしらね。ああいう地位にいる人つてみんなそう。本当の名前で自分の奥さんを騙すのが不道德だつて思つてみたい。他の名前でなら平気なのよ。子供みたくにはしゃいじやつたりして・・・

クロウイー でも侯爵だの、大使だのつて、そんな大袈裟な地位にいたら、他の名前で通そうつたつて、無理じゃないの？

ドリス そうなのよ。とても通りっこないの。知らない振りをするのが大変。だから時々私、盲で唾で、馬鹿の真似をしなきゃならないのよ。でもあの人達、その方がいいの。だからあなたも気をつけてね。

クロウイー もう一人の人はどうなの。大将だつていう人。

ドリス ああ、あの人もいい人よ。人畜無害。そうそう、あの人の方はメイスン少佐つて呼んで欲しいの。

クロウイー 少佐？ どうして？

ドリス その方が若く見えると思つてるの。可愛いわね。
クロウイー (陰気に。) おじいちゃん達のこと、可愛いと思つたこと一度もない。私、年寄は嫌いな。

ドリス おじいちゃんつて私、若い人より好きよ。第一気が楽なのよ。例えば頭痛の時なんか、「頭痛がするの」でいいの。余計な小細工は全然いらぬ。あら、私、自分には小細工をしなくちゃ。あなた、鼻に白粉あてなくていい？

クロウイー そうね、いい考えだわ。

ドリス じゃあ、こつちよ、クロウイー。(ドリス、堂々と寢室の扉に進み、クロウイーのために扉を開けてやる。)

クロウイー あーら、素敵な寢室！

ドリス そうよ、いいでしょう？ それに考えてみて、まだ一度も使われたことないの。だから余計・・・こつちよ、クロウイー。この右。(クロウイーを通してから、自分も入る。)

(暫くして玄關ホールに声。マークとオスカー登場。マークは現在六十四。オスカーは六十七。二人ともきちんとした服装。ディナージャケットにオーバーコート。二人、オーバーを脱いでかけているところ。オスカー、しきりに咳。)

マーク オスカー、君はシェイクスピアの台詞なんか知らないんだ。やっぱりただの兵隊さんだよ。ああ、そこにオーバーは掛けて。・・・「朱に染まった一塊の土くれ」だよ。

「おお、許してくれ、朱に染まった一塊の土くれ」なんだ。

「このいまましい一塊の土くれ」じゃない。(訳註

bleeding と bloody の差。bloody はイギリスの上流の芝

居では使つてはならない言葉であつた。バーナード・シヨウ

が初めてその禁を破つた。但しジュリアス・シーザーに他の

場面で bloody を使っている。この少し前の部分 render me

his bloody hand シヨウ以前にこの部分をイギリスでどう扱つ

ていたか、訳者には不明。)君には正確な引用は無理なのさ。

オスカー いや、「このいまましい」だ。「おお、許し

てくれ、このいまましい一塊の土くれ」・・・(咳が出て、

あとが続かない。)

マーク 馬鹿な。だけど、オスカー、その咳はちよつと心

配だな。大丈夫か。

オスカー 何が心配だ。私は心配などしとらん。心配は無

用だ。

マーク コートを着ておいた方がよくはないか。

オスカー 馬鹿言え。

マーク そうだ。膝掛けを持って来てやるよ。

オスカー 女の子二人と一緒に牡蛎とシャンペンをお上が

り遊ばすんだぞ。その時に膝掛け? お前さん、頭がどうかしたんじゃないのか。

マーク 態々危険を冒す必要はないんだ。二人とも昔のよ

うに若くはないんだからな。

オスカー 何て馬鹿な言い草だ。二人ともこれから先もつ

と老いぼれるんだ。その時程には今はまだ老いぼれちゃいな

い。それも言えるぞ。

マーク 臍まがりの言い方だ。その素直でないところは大

将という地位に実に相応しい。見てると日一日と大将らしく

なっているぞ。

オスカー そつちだつて、お決まりの言葉だけを繰り返す

男、大使閣下に日一日となつていっているじゃないか。ところで覚

えておいてくれ。今日は大将じゃない、少佐なんだからな。

マーク 君ね、僕はそういうことは決して忘れない主義な

んだからね。そちらこそ僕の年のことを忘れては困るぜ。

オスカー 何歳だつたかな。

マーク 何十何とぎつちりしちやいな。五十の半ばだ。

オスカー はっ!

マーク 何か言つたか?

オスカー 「はっ!」とね。それでデニスはどうなんだ、物

調子は。

マーク(考えながら。)いいか、オスカー、私はだな、物

事を大袈裟に考える傾向などないと自分では思っている。

オスカー ほほう。

マーク だからな、たとえ僕がデニスのマーク・アントニー

の出来栄えを褒めちぎつたとしてもだな、それは別に親の鼻

眞目ということにはならない。僕は冷静なんだから。たとえその出来が、アーヴィング以来の好演だったと言ってもだ。

オスカー お前さん、アーヴィングのアントニーは観てないよ。(訳註 アーヴィングは名優。)

マーク どうして分かるんだ、そんなことが。

オスカー アーヴィングはアントニーをやってないんだ。

マーク じゃ黙ってればいい。君だってアーヴィングのアントニーを観てないんだからな。比べようがないよ。

オスカー (少し自信なさそうに。)で、それからの計画なんだが・・・どうなってるんだ。

マーク ドリスと私はここで夕食を取る。君も同じような計画があるんだらう？

オスカー 僕の部屋に給仕の必要のない、軽い食事を一応用意してはおいだがね。

マーク 一応・・・用意してはおいた・・・どうしたんだ。勇気がなくなつたのか。

オスカー (悲しそうに。)いや、勇気はある。なくなつたのは若さだ。

マーク 馬鹿な。「なげるな、最後まで。」「これが僕のモットーだ。

オスカー モットーはモットーでいいが、いつかはなげる時が来る。それももうすぐだ。死ねば終だからな。

マーク それはそうだ。しかしその死ぬ瞬間、僕は実によく整理された僕の人生、実にうまく操ってきた僕の二つの人生を振り返ることになるんだ。

オスカー そうだ。二つの人生。しかしよくまあここまで

ばれもせず通して来られたな。驚くよ。

マーク 驚くことは何もないさ。いつも言ってきたらう？ ああいうことを着実に実行すれば、必ず切り抜けて行けるものなんだ。技術、応用力、洗練された感覚、組織力さ。これがなければな、オスカー、僕はとつくの昔に二つの人生に

は躓いていた筈なんだ。

オスカー フーム。(実績があるんじゃない。言わせておくしか手はないか。)

マーク 生きる空間を二つに分ける。合法と非合法、ロマ

ンチックで危険なものと、平凡で安全なもの。これをきちんと区別して、その両方を最大限に活かすんだ。もう昔になるが、君は丁度この部屋で言ったな。そんなことは不可能だと。

僕はやってきたぞ。ここロンドンでだけじゃない。パリでも、ローマでも、ストックホルムでも、ラ・パースでも。

オスカー パリでは何様だったんだい。ムッシュウ・ドゥルワ、ゼロゼロ・サンク？(訳註 ドゥルワは伝説「右・・・ライト」。ゼロゼロ・サンクは意訳、「005」)

マーク いや、ただのミスター・ライト。イギリスの彫刻家。モンパルナス、四階のスタジオ。可愛いモデルがいて・

・

オスカー 名前はミミ。(訳註 ミミは歌劇「ラ・ボエーム」の女主人公。)

マーク いや。アルベルチヌ。

オスカー 肺結核で死にかけて？(訳註 歌劇のミミがそう。)

マーク いや。ただの実存主義者。ミスター・ライトはパ

りで幸せだった。そして勿論ピンフィールド卿もだ。

オスカー 運がよかったのさ。最初から最後まで。ただの運だよ。

マーク 運、それは僕の辞書にはない。

オスカー しかしな、考えてみるよ。大変な危険を冒しているんだぜ、君はいつだって。今夜だってそつた……

マーク 今夜？ 今夜っていうのは見事に僕の計画能力を發揮できた好例だよ。これでこの計画は駄目だっていうぎりぎりの瞬間に、キャロラインが流感にかかって医者が出を止めていることを知ったんだ。それからの僕の行動の素早かったこと。すぐさまチャャーリー・ベイズウオーター（訳註 一幕にでたチャャーリーか？）に電話だ。彼が陸軍大臣と芝居に行く予定だったのを知っていたからな。我々二人、それにその二人はちゃんと芝居開始五分前にカメラマンのフラッシュを浴びるといふ訳だ。連中わんさとたむろしているのは分かっているし、こちら四人は連中のいい餌食になる筈なんだ。（勝ち誇って。）タトララーに我が写真はのり、それを僕は水曜日に妻に見せる。完璧なアリバイだ。

オスカー 女の子達は？

マーク ちゃんと別に指示がしてあるよ。写真を取られた後、君と僕は我々の席につく。するとその席の丁度隣の二つに、先週我々がオランダ大使館で偶然出会ったあの二人の女の子がちゃんと坐っているという訳さ。どうだい。細かいところに気を配って用意周到にやれば、うまく行くものさ。こつこつこのを、細工は流々仕上げを……（電話が鳴る。立ち上がって受話器を取る。）（受話器に。）ハロー……ハロー……

・えつ？ 誰？……（マークの顔、さつと変わる。ひどく下手なコックニークセンターで。）ああ、いないね。誰からつて言えばいいんだ？……ああ、ミラディー……畏まりました、ミラディー……ああ、大将もいない……いいや、ミラディー……いや、あつしは知りません、ミラディー……（電話を切る。囁き声で。）一体どうしてあいつ、ここの番号が分かったんだ。

オスカー キャロライン？

（マーク、放心したように頷く。）

マーク そうだ。あれの電話番号帳に君の昔のアパートの番号がまだあつたということが。

オスカー しかし僕がここにもうずっと前から住んじやないってことは、彼女はよく知っている筈だぞ。それに番号も変わつてる。

マーク 熱に浮かされたのかな。

オスカー 熱に浮かされたような口調だったか？

マーク いや。しかし電話じゃ分かん。どうかな、帰るべきだろうか。

オスカー まづは電話してみるんだな。

マーク うん。あ、まづい。これは駄目だ。（電話に近づくこととした時、寢室の扉開き、ドリスとクロウイーが出て来る。）

ドリス（登場しながら。）襟が割（く）れてるのよ。でも勿論一九五〇年型なんだから……ああ、ハロー、来てたの？

マーク そこにいるとは気がつかなかつたな。

ドリス ちょっと大きな声だしてくれれば良かったのよ。

そうそう、クロウイー、あなたまだライトさんを知らなかったわね。

マーク 始めまして。

クロウイー 始めまして。光栄ですわ。デニス・ライトのお父さんにお会い出来て。

マーク かつてはあの子の方が私の息子として知られていたらもんだが。今は私があの子の父親として知られるわけか。こいつはどちらかというと、「恥辱」かな。

クロウイー 恥辱？ まあま、大袈裟ね。でも好きだわ、古めかしい言い方。あなたどう？ ドリス、恥辱。

ドリス そうね。こちらは大将の・・・あー、メイスン少佐よ。クロウイー、覚えてるでしょう？ 噂したもの。ゼーんぶ。

オスカー（喜んで。）ゼーんぶじゃないことを望みますなあ。（誘惑の目付をもって言うが、咳に邪魔されてしまう。）
マーク 少佐はちよつと風邪をひいていて。鴨を撃ちに行つてひいたんだ。な、少佐？

オスカー そう。沼は少し寒くつてね。私より若い連中も随分肺炎にかかりおつて。

クロウイー じゃあ、鴨なんて撃ちに行くの、馬鹿げてるわ、ね？

オスカー いや、それだけの犠牲を払う価値は充分ありと判断しますな。戸外における躍動的な享樂、そのためなんですからな。

クロウイー 肺炎にかかったら楽しみだつて台無しじゃないの。近くに來ないで。風邪を貰っちゃうわ。

オスカー 小生から貰つて戴けるものがあれば、小生愚考しますに、たとえそれが風邪でありましようとも、小生最大の幸福者だと・・・

マーク えー、どうだ、坐らないか。

ドリス（坐りながら。）さあ、クロウイー、坐りましょう。

マーク さあ、少佐、手伝つてくれ。（訳註 カクテルを作るのを手伝えと言っている。）

オスカー うん。いや、御婦人方のためにガニミードの役目を果たすのは光栄ですな。（訳註 ガニミードはゼウスの酒を混ぜる仕事を持つ美少年・・・ギリシャ神話。）

クロウイー（ドリスに。坐りながら、囁き声で。）いやね、あの人。教養をひけらかしたりして。

ドリス あの人達、みんなそうよ。面白いじゃない。

クロウイー 面白いことなんかちよつともない。なんだか、そうね・・・いやらしいわ。

オスカー（マークに。）ちよつと抜けて、キャロラインに電話したらどうだ。

マーク（オスカーに、囁き声で。）いや、劇場からかけることにする。さあ、ドリス、牡蛎だよ。それにクロウイー、こつ言つて許されるなら・・・

クロウイー（ドリスに。）許されるならつて、何のこと？

ドリス（囁き声で。）クロウイーつて呼んでいいかつて。

クロウイー そんなこと、許すも許さないもなしでしょう？
ドリス シツ。

（オスカー、席に坐る。その時また咳。）
マーク 寒いんじゃないか。肩に何かかけるものはいらな

いか、少佐。

オスカー いや、いらぬよ、ライト。そんなものかけて魔法使いのお婆さんに間違えられるのはいやだからね。(ドリス、陽気に笑つ。訳註 Whistler は不明。魔法使いのお婆さんと訳しておいた。)

ドリス 魔法使いのお婆さんはよかつたわ。可笑しい。可笑しいわね、クロウイー。

クロウイー (ひどくタイミンク悪く。) そうね。(ケラケラと笑つ。) 可笑しいわね。そうそう、あなた、さっきの話、ほら、店の奥さんにしたつていう、あの続き、話して。

(その間にマーク、シャンパンを開けている。一方、オスカーは、女達から見捨てられた形で、ぼんやり坐っている。)

ドリス ええ・・・それで私、言つてやつたわ。「十分なんて、たいした時間じゃない筈ですわ。だつて、あのカズバツク皇女つたら、何時だつて朝三十分遅れて来るじゃありませんか。それなのに奥様はあの人にはなんにもおっしやらない」つて。

クロウイー そうよ。私、あの奥さんの正体、ちゃんとな分かつてるんだから。俗物よ、あんなの。とにかく貴族じゃないわよ。本当の貴族じゃね。

ドリス さあ、それはどうかしら。あの人、アナトリア出身なのよ。

クロウイー 私だつて、ピナー出身よ。でもいくらピナー出身だからって、それで伯爵夫人になれる訳ないじゃない。それにもしあの人が本当の貴族なら、あの店じゃなくてハートネルで働いてる筈だわ。(マークが注いでいるのを見て、

その罎を指差して。) それ、ボランジエ?

マーク いや。モエ・エ・シャンドンの三十七年もの。ボランジエの方が良かった?

クロウイー 注いでしまつたんでしよう? だからもういいのよ。(マーク、グラスをドリス、オスカー、と自分に配る。)(ドリスに。) そうよ、あの奥さん、あんたの言う通りよ。嫌味の極よ。クロードさんを扱つあの態度。それに勿論フレディーさんとは出来てるのよ。ちゃんと分かつてるわよ、ね、私達。それに時々あの奥さんたら・・・

マーク(坐つてグラスを上げながら。) さて、御婦人方、乾杯なんだが、単純に行こつ。愛に・・・乾杯!

ドリスとクロウイー(眩き声で。) 乾杯!(舐める程度の形だけの乾杯。)

クロウイー(ドリスに。) この間、クロードさんに、本当に何でもないことで奥さん怒鳴つてたわ。

ドリス そうよ。金糸のラメの入つた織物で、ギヤーギヤー叫んでたわね、覚えてる?

クロウイー 覚えてるわよ。あれを金切り声つて言うのよね? あの声を。(二人、陽気に笑つ。)

ドリス(どうやら店の奥さんの声色で。) その袖を下ろして、すぐ袖を下ろすんです。今すぐに!

クロウイー(どうやらクロードさん(男)の声色で。) 奥様、それはあまりにひどいおっしやり方。私は本当にどうしていいか。どうぞお止めになつて。どうぞ。(二人再び笑つ。

オスカー、テーブル越しにマークと話。男達の会話の最中にも女二人の会話は続く。)

オスカー 最近ゴルフはどうだい？ よく行くのか？

マーク いや、そんなには。時々サンクルーで一ラウンドするぐらいだな。

オスカー サンクルー？ 僕もやったことがあるぞ、あそこは。いいコースじゃないか。

マーク 悪くない。ちよっと短いかな、コースとしては。

オスカー 九番を覚えてる。グリーンの後ろに木がある。右手には大きなバンカーがあつてな。

マーク それは十一番じゃないか、そのホールは。

オスカー 十一番だつたかな。九番だと思つたが。

(同時にドリスとクロウイー。)

ドリス そうよね、あんなこと言うなんてひどいのよ。だつてあのドレス、そんなに悪くなかつたじゃない。ボディスは形とれていたし、それにクリノラインのスカート、悪くなかつたわ。

クロウイー そう。私もよく覚えてるわ。奥さんがあんな叱り方をするなんて、本当に酷いわよ。

ドリス そう。ほんと。あんな叱り方、絶対ないわ。そうよ。昨日のグラデイスを叱つた時だつて……

クロウイー あ、それは聞いてないわ。何て言つたの、奥さん。

ドリス 酷かつたわよ、あれ。「出て行け」つて。「出て行け」、それからあとね、「お前なんかただの……」(その後は嘔き声になる。有り難いことにそれはクロウイーにしか聞こえない。この時までには男達はゴルフの話をすませている。)

クロウイー まさか！

ドリス 本当よ。本当に言つたんだから。(三つの言葉を繰り返す。最初の言葉は *ロ* (ビー) で始まる単語なら何でもよい。二つ目の言葉は *三* (小さな) 最後は口を丸めて突き出す単語。(訳註 どうや *Whore* (売春婦) という単語らしい。)

クロウイー まあ、なんて酷い。

ドリス 酷いでしょう？ とにかく酷いの。(その酷さを顔を蹙(しかめ)ることによってクロウイーに表現して見せた後、男達へのエチケツトを思い出し、マークに。) あら、今日は、ライトさん。ご機嫌いかが？

マーク ああ、ご機嫌うるわしいよ。有難う。

ドリス そう。それはよかつたわ。

マーク で、そちらの方は？

ドリス まあまあつていうところね。私またいつもの頭痛がしてきてしまつて……

マーク (いやな顔。) そりやまずいな。(問。)

クロウイー 変だわね、ドリス。あなたが頭痛つていうもんだから、私も気がついてみたら頭痛だわ。それも割れるような痛み。

ドリス あらまあ、可哀相に。

オスカー (クロウイーに。) それはいけませんな。具体的には頭のどの部分ですか？ ここ？ (額に触る。)

クロウイー そうね、頭中、全体。

オスカー 頭全体？ 分かつた、それに效くやつを知っていますよ。最近出来たばかりの頭痛薬。そつだ、芝居がはね

て、マークとドリスがいなくなったら、小生のアパートでちょっとした食事を。小生、最大の光栄ですなあ。

クロウイー まあ、（微かに。）素敵！（テーブルの向こうにいるドリスに「絶望！」という表情をする。）

マーク（窓のところで。）車が来てる。

オスカー（自分の時計を見て。）まだ充分時間がある。ゆうに三十分以上あるな。

マーク ちよつと早く着いておきたいからな、今夜は。じゃあ少佐、支度をするか。

（オスカー、立ち上がるうとするが、うまく立てない。坐りこんでしまう。）

オスカー 変だな。足がテーブルの足にひっかかって・・・（オスカー、陽気に笑つ。が、その笑い、再び咳となる。マーク、近寄って立ち上がるのを助けようとする。）

マーク さあ、手を貸そう。

オスカー（嫌がつて。）いいんだ。自分で出来るんだから。（勢いよく立ち上がり、寝室の方へ進む。）彼の私への扱いを見ると、まるで私がちんばのおいばれみたいだ。全くかなわんよ。（オスカー、陽気に笑い、女達に手を振り、寝室に入る。）とすぐ、寝室から大きな音がする。オスカーが何かにぶつかり、倒れる音。）

マーク（驚いて。）どうした、少佐！ 何をやったんだ。

（マークも寝室に入る。）

ドリス ね、言つてた通りでしょう？ あの人達、気がいいのよ。気がよくなって、可愛くて・・・

クロウイー（明らかにうんざりしている。）私の人の方、

ちつとも気がいいことなんてありやしない。

ドリス 気がいいのよ、あの大將だつて、本当は。よく付き合つてみれば分かるわ。

クロウイー 私、よく付き合つてみたいなんて気にならないわ。

ドリス あの紳士ぶつてる話し方、気にしちや駄目よ。言つたでしょう？ あの人達みんなああなんだつて。

クロウイー（真似をして。）「小生、最大の光栄ですなあ、小生のアパートでちよつとした食事を・・・小生、愚考しまさに、最大の幸福者だど・・・」なにあれ、パイロンのつもり？

ドリス 面白いじゃないの。そう思わない？

クロウイー ちつとも。私、家に帰りたい。

ドリス まあ、あなた、帰りたいの？

クロウイー 最初から来るんじゃないわ。洗い物、ママに手伝つて約束してたのよ。そしたらこんなじゃなくってジャンパーでいられたんだから。

ドリス 分かつたわ、クロウイー。じゃ、お帰りなさい。あの人達気にしない。紳士つてそういうこと気にしないの。それがいいところなんだから。あの人達、何に對しても決して気にしないの。（男二人、寝室の扉の方に近づいて来たことが話声で分かる。）ほら、出て来るわ。あなたは何も言わないのよ。私が全部やるから。（マークとオスカー、寝室から登場。）

マーク（入つて来ながら。）ただどこで電話しなきゃならんことはないだろう？ あいつは、僕がクラブにいると思つ

ているんだし。しかしそれにしても分からん話だな。どうしてこの番号が分かったんだ・・・

オスカー そんなこと、僕に訊かれても分からんさ。

マーク さあ、用意は出来た？

ドリス ねえ、ライトさん。困ったわ。クロウイー、急に調子が悪くなっちゃって。

マーク そりゃいけないな。

ドリス 牡蠣が少しいたんでたんじゃなかった。ね、クロウイー？

クロウイー そうみたい。いたんでたのよ、きつと。

マーク いたんでる訳がない。あれは僕のクラブから直接取り寄せた・・・

ドリス 可哀相なクロウイー。すぐ家に帰らなきゃ。そうなんでしょう？

オスカー それは駄目だよ。

クロウイー そう、家に帰らなきゃ。劇場のいい椅子にそうしたら大変だわ。そうでしょう？

ドリス 私、車で送るわ。五分もかからないから・・・

オスカー 私に送らせて欲しいが・・・

クロウイー（鋭く。）それは駄目。（悪かったと、思い直して。）いいえ、いけませんわ、少佐。どつぞ、お構いなく。

オスカー（自信たっぷり。）おお、我がいとしの君よ。この我々の短き出会いのしばしの延長を。ただ五分、ただ五分の延長、それで小生は大満足・・・（クロウイー、オスカー

を見つめる。一時的にパイロンに変身しているおぞましい蛇を見るような目つき。微かに体を震わせてマークの方を見る。）

クロウイー ええ。お呼び下さって嬉しかったわ、ライトさん。いつかまた呼んで下さいね。さ、ドリス、行きましよう。

オスカー（クロウイーに進み寄って。）この邂逅の更改をいかにして小生は持てましようや。

クロウイー（どうしようもないという表情。）かいこうのこうかい？ ああ、私の電話番号を知りたいのね。

オスカー 小生の榮譽といたすところで。

クロウイー ファビアに電話して下さればいいの。でも奥さんが、仕事中の電話、本当に嫌うの。奥さんをわざと怒らせるのって、私いやだもの。分かって下さるわよね、私、あそこは仕事時間中しかないの。だから・・・行きましよう、

ドリス。（クロウイー、飛び出すように退場。ドリス、扉のところで少し躊躇って。）

ドリス（オスカーに。）心配しないで、少佐。私うまくやって上げるから。（クロウイーの後を追って退場。オスカー、諦めたように肩をすくめる。）

マーク（くすくす笑って。）可哀相に、オスカー。運が悪いな。

オスカー 何が可笑しいんだ。客の一人に毒をしかけたいて。

マーク（笑って。）馬鹿な。毒なんかじゃないよ。君から逃げただけさ。

オスカー 笑うことはないぜ。僕が笑いの種なら、君だつてそうなんだ。

マーク 笑いの種？ 自分のことだろう？

オスカー 二人ともなのさ。俺達は何者か。ただのお笑い漫画の主人公さ。年齢からくる貫禄だって、何の役にも立ちたくない。

マーク 馬鹿な。役に立っているさ。その貫禄があつて初めて、大将にも大使にもなれているんじゃないか。

オスカー 普通はな。しかし俺のような大将でもない。お前のような大使でもないんだ、そいつは。貫禄のある大将、貫禄のある大使・・・くそつ、そんな奴はいくらでもそこいらにころがっている。生温い水を飲んで、擦り下ろした人參を食べて、オックスブリッジ仕込みの模範的英語を喋って。なんだ、あいつら。俺は貫禄なんて大嫌いだ。お前はどうか。

マーク 嫌う訳にはいかないな、僕は。貫禄そのものが僕なんだからな。（窓に石が当たる音がする。）何だ、あれは。

オスカー 窓に石があたってるんだ。（もう一個あたる音）まただ。

（マーク、窓のところに行く。）

マーク 多分ドリスだ。鍵でも忘れたんだろう。（外を見て。）ドリス？

声（外から。）マーク！

マーク（はっと後ずさりする。言葉が出ない。）何だ、これは。オスカー・・・どうなってるんだ、これは。

オスカー どうした。

マーク キャロラインなんだ。

オスカー（立ち上がりながら。）まさか。

マーク それが、そうなんだ。

（女性の声がかかっているのが聞こえる。）

キャロライン（外から。）マーク！ マーク！ 変な真似しないで。早く入れて。

マーク（恐慌を起こして。）僕は見られた。僕は終だ。

オスカー 僕のアパートだと言えいい。二人だけで食事をしていたと。

マーク ドリスが帰って来る。そしたら・・・

キャロライン（外から。）寒いよ、ここは。凍えてしまいわ。風邪なのよ、私。早く開けて、マーク。お願い。

オスカー ドリスは僕の友達だって言えいい。入れるんだ、マーク。

マーク（半分泣きながら。）どうしよう、オスカー。どうしよう。（ゆっくりと窓に近づく。窓の外に、大袈裟に冷静を装い。）おーい、誰だ？ ああ、キャロラインじゃないか。5

これは驚いた。家で寝てるんじゃないのか。

キャロライン（外で。）家じゃないわ、マーク。私、ここ。だけどすぐ入れてくれなきゃ明日の朝はお棺の中だわ。

マーク（驚いた様子を見せて。）入れてくれ？ そりゃそ

うだ。（オスカーにわざと大声で。）オスカー、オスカー。キャロラインを君のアパートに入れてやってくれ。今行くからな、キャロライン。

オスカー 熱に浮かされて来たのかな。

マーク どうもそつは見えないが。

オスカー 部屋着か何か着ているのか？ どうなんだ。

マーク よく見えなかった。

オスカー 見えた筈だぞ、それくらい。

マーク とにかく行って入れてやってくれよ。

(オスカー 退場。一人残ってマーク、二人の女性の痕跡を消そうとやっきになる。引き出しの中に皿を手あたり次第に投げ込んでいる最中に、玄関の扉が開く音が聞こえる。キャロライン登場。その後オスカー。キャロラインは堂々とした老婦人。美人。イヴニングドレスにコートを着ている。)

キャロライン 今晚は、あなた。

マーク 今晚は、キャロライン。寢床に入っていないきやいけないんじゃないのか。

キャロライン お昼に熱をはかったら、下がっていたの。で、起きたの。五時にまたはかって、やはりなかったわ。それでデニスの初日に行ってやることに決めました。私の席は慥かチャーリー・ベイスウオーターに譲ってしまったわね、あなた。

マーク うん。しかしチャーリーは行けなくなってね。

キャロライン あら、運がいいこと。

マーク 僕をここで見付けるなんて運がいいよ、キャロライン。オスカーのアパートで。

キャロライン そうね。クラブに電話したら、いないって言うから。

マーク 実は役所で遅くなってね。帰ろうと思った丁度その時、長い電話が入ったもんだから。

キャロライン 複雑な暗号で書かれたのじゃないんでしょね。

マーク それがそうなんだ。ひどくこみいった暗号でね。

キャロライン メソポタミアからの？ 今は勿論違ってる・

・別の名前がついている筈ね。

オスカー 窓に石を投げて合図とはお手数をおかけしました。どうも玄関のベルがここからは聞こえ難くて。

(キャロライン、部屋をなんとなく眺めまわす。)

キャロライン (ラジオに目を止めて。) なあんだ、ここにこのラジオあったの。どこに行ったのかと思っていたわ。

マーク そのラジオは・・・あー・・・僕がオスカーに貸したんだ。言っておくべきだったな。

オスカー いや、実に助かるんです、このラジオは。実際に六時のニュースがあつて・・・

キャロライン 芝居が始まる丁度二十分前になら、電話していいってデニスが言っていたわ。今何時かしら。あ、あの時計、うちの居間にあったのだけ。約二十五分前ね。でもあれ、いつも一週間に三分進んでいたけど、あなた、毎週直し60てる？

マーク どうなんだ、オスカー。

オスカー うんうん、定期的にやってるよ。そう言えば君のプレゼントだったな。重宝してるよ。

キャロライン あと出発までに七分半ね。車は頼んだのね、あなた。

マーク うん。

キャロライン じゃあそれをキャンセルして。私、タイムラーで来たの。

マーク ああ、そうだったの。そいつはいい。(囁き声で、オスカーに。) ドリス、ドリス。

オスカー ああ、キャロライン。実はその、僕の友達が一

緒に来ることになっていて・・・

キャラライン そうだったわね。陸軍大臣ね。

マーク 違うんだ。彼も行けなくなってる・・・

キャラライン 「行けなくなってる」が多いわね。

マーク 実はそのオスカーの友達っていうのが、女性でね。

キャラライン メイベル・ブライトニングシー？ 懐かしいメイベル。でもあの人、来られるの？ あんな年で。

オスカー いや、実はメイベルではなくてね、キャラライン、君が知ってる女性じゃないんだ。若い女でね。ちよつと彼女におごろうかと思つて、用意したんだが。（シヤンペンの方に進み。）そうだ、キャラライン、君も一杯どうかな。

モエ・エ・シャンドンの三十七年ものなんだ。（玄關の扉が開いて閉まる音。）これがその女性・・・

（ドレス登場。）

ドレス 送つて来たわよ。遅すぎはしなかつたでしょう？

少佐。

キャラライン ドリス！ 嬉しいわね。デニスの初日に私、お前と一緒に行けるのよ。

ドレス（振り返つてキャララインを見る。）あつ！

キャラライン そう。私、熱下がったの。だから起きて来たわ。ほら、この服、お前ファビアで見せてくれたわね。この白と合うだろう？

ドレス ええ。合いますわ。

キャラライン 初日に着て行けるなんて運がよかつた。それに丁度一個席が明いてたつて。

ドレス ええ。クロウイーのが。

キャラライン クロウイー？

ドレス ええ。背の高い、フィリップスン大將はきつとお気に入るだろうつて、私奥様にお話しましたわ。

キャラライン ああ、そうだったわね。

ドレス それが急に頭痛がして・・・牡蛎にあたつたんですの・・・じゃあ、行くの、この四人なんですわ。まあ素敵。デニスさんもきつとお喜びですわ、パパとママが揃つて最前列なんですもの。

キャラライン お前、すぐ出られるの？

ドレス ちよつとだけ。髪を直しに。すぐすみすみから。（寢室に退場。）

キャラライン いい子だわ、あの子。パリでのあの実存主義の女の子よりずっといい。

マーク（呻く。）キャラライン！ キャロライン！

キャラライン 何？ あなた。

マーク 君は爆破して吹つとばしたよ、この僕の全存在を。

キャラライン そうかしら。それなら謝りますわ。私、出来ればこういうのは避けたかつた。でもさっきのあの電話、あれを聞いてはね。「いや、あつしは知りません、ミフディー」

何？ あれ。あれでもコックニー・アクセントのつもり？ 本当に呆れて・・・ちよつと荒療治をしないととてもデニスの初日にあなたと一緒にには行けないと思つて・・・

マーク 何時から知つてたんだ。何時からなんだ。

キャラライン そうね、待つて頂戴。（オスカーに。）あれは何時のことだったかしら、オスカー。マーク・ライトにアパートを貸すつていうの。もう随分前のことじゃない、あ

なた、あれ。

オスカー 三十三年前。たった三十三年前のこと。

キャロライン あら、もう？ あつという間に過ぎるものね、時つて。あの時ウィルブラーム・テラス十二番の模様替えの請求書が私の机にまわつて来たわ。

マーク うーん、そいつは・・・

キャロライン それからマーク・ライト氏宛の手紙ね。何通も来たわ。あなた、大使館で秘密書類をあんな風に無造作に扱つてはいないでしょうね。マーク・ライト氏宛の手紙はまるつきりフリーパスだったわ。

マーク 君にはマーク・ライトは僕の古い親友だと説明しておいたから・・・

キャロライン あなた、いろんなことを言つたわ。私に变なことを信じて貰おうと思つていろんなことをね。外国の外務大臣にあんな下手な嘘を話していたのかしらね。私、心配。国際連合に行つたら、私達に話しかけてくれる人、誰もいないんじゃないかしら。

オスカー 随分複雑な蜘蛛の巣をはつていたものだなあ、我々は。

キャロライン 複雑なことなんかちつとも。単純な蜘蛛の巣ね。おまけにあなたつたら、私がドレスを買いに行く、行きつけの店の売り子にいつも目をつけるの。それも私が特別に鼻屑にしている女の子にね。

マーク ドリスはひとつことだつてそんなこと言つたことがないぞ。

キャロライン それは当たり前でしょう。堅く口止めして

ありましたからね。それにあの子、いい子なの。裏切るなんて、決して。

マーク キャロライン、君は僕をこの三十三年間騙し続けたんだ。君の今まで言つたことは全部、不埒、不道德な、僕が生まれてからこのかた聞いたこともないけしからん話なんだぞ。

キャロライン 不埒、不道德でけしからん？ あなたどう思つて？ オスカー！

オスカー 私も、どうもこれは、いや、驚きましたな。マークと同じで。

キャロライン すると私は不埒で不道德なんですわ、きつと。私、普通の意味での不道德っていうの、昔から好きじゃなかつたけれど、そうね、今までのこと振り返つてみると、二、三度、ほんの二、三度、私、自分をキャロライン・ライ⁶²トと名乗りたいと思つたこと、あつたわ。

マーク（茫然と。）ああ、キャロライン！

キャロライン でも本当に名乗つたことはないわ。一度も。マーク ふん、それはまあ、良かった。

キャロライン（明るく。）その他のことでは不道德だったことは一度もないわね。マーク・ライト氏が問題を起こさないよう、色々な手をつつたこと、これはあなたの言い方で言う、ちよつとした私の気晴らしね。不道德なんてものではないわ。

マーク なあ、オスカー、君に訊くが・・・

キャロライン でも私から問題を起こしそつになつたこと、ないことはないの。それは最初のあの女。何て言つた？ あ

の馬鹿なフラッパー。あの子の名前。マーク、あの子の名前は何なの？（マーク、答えない。）

オスカー、何なの、バスでこの人が出会ったあの馬鹿な子？

・・・そう、ダフニ・ブレンティスよ。（マーク、呻く。）そう。あの子には問題を起こしそうになった。でも私考えたわ。私がおもひこで何かしたら、それはあの人、ちゃんと言うことをきいてあの子を諦めるでしょう。でもその後一生私を恨むわ。だからそんなことしたって何にもなりはしない。それから外交官を辞める気になったことがあった。それも馬鹿な女のために。何だったかしら、あの子の名・・・そう、ノラ・パタスン。あの時はさすがに私も一悶着起こす決心を固めたわ。でも突然あなたその考えを捨ててしまった。あの時は私、本当にほっとした。

マーク そうだ、デニスが話したんだな。

キャロライン（不思議そうな顔。）デニスですって？ マーク、あなたまさか、あなたに翻意させたのはデニスだったって言うんじゃないでしょうね。ああ、そうだったの。私には分かってた。あなたっていう人は、決して自分で翻意なんか出来る人じゃないって。でも今の今まで、救ったのはオスカーだと思っていたわ。そう、デニスだったの。（優しく。）えらい子だわ。それに母親にもちゃんと言わないでおくなくて。

マーク なあ、オスカー、これが僕の妻だ。僕が終始、正直さと実直さを金科玉条としている女だと思つて、僕が崇めてきた女なんだ。

キャロライン 正直で実直・・・いかにも頭が悪そう。で

も少し違つていたかしらね。とにかく私はノラ・パタスンに何もしなかった。実際、その必要がなかったわ。それから他にも沢山あった。でもそれはちつとも気にならなかった。

マーク（唸る。）うーん。

キャロライン 私、最初からこう思つた。自分を誰か別の人物にしたいつていうこの願望は、きつと根が深いんだわ。私はあの人妻。それで時々あの人、マーク・ライトになりたいとしたら、それは何か私に足りないところがある。

あの人に私からは与えられない何か、そして他のところでもら見つけられる何か。私、マーク・ライト夫人になれたらと思つた。でもそれは無理。私はマーク・ピンフィールドの妻以外のものにはなれない。なれないんじゃない、私はピンフィールド夫人でいたいのだ、という自分の気持ちがあったの。それでマーク・ライトに対する権利はすっかり放棄しようとして決心した。そしてそれを実行したわ。勿論マーク・ライトがあまり羽目を外さないように細心の注意を払いましたけれど。例えばパリでは、大使館の探偵に何時でもあなたを尾行させました。仕方がなかったわ。（オスカーに。）モンパルナスで何を仕出かすか、心配だったもの。（マーク、再び呻き声を上げ、両手で顔を覆う。キャロライン、自分の時計を見る。）そろそろデニスに電話をかける時間。オスカー、呼びだして。お願い。ウオータールー・六八四九よ。

（オスカー、受話器に進む。）

キャロライン あなた、デニス、ちゃんとやるかしら。私、心配。私の手を握つていて下さるわね、隣で。あら、あなた、ディナージャケットに硬いカラーなんかつけて。それじゃま

るで旧式、古くさいわ。(マーク、最後の呻き声。キャロライン、マークの手を取る。)

オスカー ハロー、楽屋?・・・ライトさんに繋いで。こちら母親なんだ。

(キャロライン、立ち上がり、受話器に近づくと、オスカー、マークに近づくと、マーク、陰気に椅子に坐っている。)

キャロライン (電話に。) デニス?・・・うまくいくよう祈ってるわ。頑張ってるね。・・・いいえ、行くの、私。熱は下がったの。

オスカー 二つの世界を自由自在にか。その才能さえあれば、こんな簡単なことはありはしない!

マーク 参ったよ、オスカー。恥だ。恥だけだ。

キャロライン(電話に。) まあデニス、有難う。それは私達嬉しいわ。(マークに。) あの子、初日のパーティーは欠席して、私達と食事をしたって言うの。優しい子だわ、ね?(電話に。) デニス、どう? 調子。(マーク、立ち上がる。)

心配はいらないわ。きつと素敵なアントニーよ。じゃあ、頑張ってるね。お父さんよ。(マークに受話器を渡す。マーク、ぼつとした儘受け取る。)

ドリス(部屋に入りながら。) 髪、これでいいかしら。

マーク(電話に。) デニスか。・・・いや、幸運を祈る。それを言おうと思ってるな。・・・そうだ、さっきオスカーに言っていたんだ。お前のマーク・アントニーは絶品だ。・・・

(マーク、オスカーの合図に気付き。) トウリー以来の出来だと思ってる。

オスカー(囁き声で。) 「朱に染まった」かどうか、訊い

てみる。

マーク 黙ってる。(電話に。) 何だって?・・・ああ、お母さん? そうだよ。お前が喜ぶだろうって・・・

オスカー(前より大きな声で。) 「朱に染まった」かどうか、訊いてみる。

マーク もう止めとけよ。・・・(電話に。) おじさんだよ。オスカーの奴だ。「朱に染まった一塊の土くれ」か、「いまましいこの土くれ」か訊いてくれなんて。馬鹿な考えを起こしておって・・・(オスカーに。) そら見る、オスカー、あいつ混乱して分からなくなつたぞ。どうしても思

い出せないって言うてる・・・

オスカー ああ。そいつはいかん。(受話器をひったくる。必死の勢いで受話器に。) おい、いいんだぞ、デニス、

あんなこと関係ないんだから。頭に浮かんで来た台詞をた、⁶4
だ言ってるやいいんだから。「朱に染まった」だろうが、「いまましい」だろうが、問題じゃない。いいな、問題じゃないんだからな。

(マーク、また受話器をひったくる。)

マーク おじさんの言う事を気にするな、デニス。あいつ酔っ払ってるんだ。・・・うん、これ以上邪魔はしない。ベストを尽くすんだ。

ドリス 私からも頑張ってる・・・

マーク ああ、ドリスからも激励の言葉だ。・・・大丈夫なんだ、デニス。そんなに小さな声で言わなくても。ごまかす必要はない。もうばれるっていうのはなくてね。・・・いや、長い話だ、これは。後で話すよ。

(電話を切る。)

キャロライン さあ、行きましょ。遅くなるね。オスカー、あなたドリスを車までね。私のバッグはどこだったかしら。

ドリス さあ、少佐。今夜の私のお伴は少佐ね。

オスカー それは光栄至極。

ドリス 後でダンスも付き合つたのよ。

(ドリスとオスカー、退場。)

キャロライン (ラジオの上の指を走らせながら。) ウイリアムズに訊いてみなくちゃ、このアパートのやっていき方。

マーク (全くお手上げ。) ウイリアムズに訊いてみなくちゃ、ね。

キャロライン そう。ウイリアムズのことではあなたに白状しなくちゃ。召使いの事情、最近ひどく敵しいの。それで、ウイリアムズをただ遊ばせておくのは、と思って。時々ベルグレイヴ・スクエアに来て貰っていたの。ほんの時たまだけ。

マーク ほんの時たまね。

キャロライン あなた、多分構わないって言うだろうと思つて。

マーク 僕が構わないって、ね。

(キャロライン、ブロンズのシルヴィアの頭を眺める。)

キャロライン シルヴィアって、本当に可愛い顔をしていたのね。あなた、シルヴィア、今でも少しこの面影あるわよ。

マーク 何だって？

キャロライン 勿論年をとつてるわよ。そうね、何歳かしら。あなたより一つ下よね。だから、六十三。そう、あの入

やつぱり六十三歳の顔をしているわ。残念だけど。

マーク (呆れて。) と言うと・・・君は知ってるのか、あの女を。

キャロライン シルヴィア・グラントを？ だって私達時々ブリッジをしているんですもの。

マーク (ヒステリーに笑つて。) それは無理だ、キャロライン。そいつはいくら何でも。いくら僕でもその手にはならない。彼女は南アフリカにいるんだからな。

キャロライン あなた、知らなかったの？ あの人も、もう何年も前に帰っているのよ。戦争前に。今チエスター・スクエアに住んでるわ。そうだ、あなたにいいことがして上げられるわ。来週あの人を食事によびましょ。

マーク 食事に・・・よぶ！

キャロライン 本当にあの人可愛いわよ。何年も会つてなくて、また会えるなんて素敵じゃない、ね？

マーク キャロライン、君は実際酷いやつだ。全く酷いやつだ。僕は降伏だよ、無条件降伏だ。シルヴィアもマーク・ライトの運命に引きずられて仮面を剥がされる末路となるか。

キャロライン それは仕方がないんじゃないかしら、あなた。今までずっとマーク・ライトはシルヴィアに引きずられてきたんですからね。(少しはお付き合いをしなくちゃ。)

(オスカー、出て来る。オーバーコートを着て、マークのオーバーコートを手持っている。) 分かりました、オスカー。今行きます。あなた、そんなにがっかりした顔をしないで。

会えばきつと気に入るわよ。素敵なお婆さん。(マークに微笑む。間の後マーク、微笑み返す。キャロライン退場。)

オスカー（マークにコートを着せてやりながら。）どんな気分だ？ 十七歳から五分間の間に六十四歳になるっていうのは。細工は流々仕上げをこらうじらうって訳だ。（くすくす笑う。）

マーク 僕に言えることはだ、細工も流々だったし、仕上げもまあまあだったってことさ。普通の人間だったら、これ以上のことは言えないさ。君を含めてね。

オスカー 大使訓練所の小学校を卒業というところかな、その言い草は。

マーク この言い草は大使のものじゃない。マーク・ライト氏が彼の生涯で吐いた最後の台詞さ。（部屋を眺めて。）失敗だったか。面白かったな。まあいい、最後までなげなまあ、これだな。（二人、扉の方へ進む。オスカー、灯を消す。）さあ、行こう、オスカー。（二人一緒に玄関ホールに退場。）

（幕）

平成七年（一九九五年）六月十日 訳了

<http://www.aozora.gr.jp> 「能美」の項 又「せ」

<http://www.01.246.ne.jp/~tnounmi/nounmi1/default.html>

Who is Sylvia? was first produced at the Criterion Theatre, London, on October 24th, 1950, with

the following cast:

MARK	Robert Flamyng
WILLIAMS	Esmond Knight
DAPHNE	Diane Hart
SIDNEY	Alan Woolston
ETHEL	Diana Allen
OSCAR	Roland Culver
BUBBLES	Diana Hope
NORA	Diane Hart
DENIS	David Aylmer
WILBERFORCE	Roger Maxwell
DORIS	Diane Hart
CHLOE	Joan Benham
CAROLINE	Athene Seyler

The play directed by ANTHONY QUAYLE Settings and costumes by WILLIAM CHAPPELL

Rattigan Plays The Trustees of the Terence Rattigan Trust

Agent: Alan Brodie Representation Ltd 211 Piccadilly London W1V 9LD

Agent-Japan: Martyn Naylor, Naylor Hara International KK 6-7-301 Nampo-dai-cho Shibuya-ku Tokyo 150 tel: (03) 3463-2560

These are literal translations and are not for performance. Any application for performances of any Rattigan play in the Japanese language should be made to Naylor Hara International KK at the above address.
